

---

# セクシーバイオレンス～【俺と閻魔の青春日記】

Dear

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セクシーバイオレンス〜【俺と閻魔の青春日記】

### 【Nコード】

N9787A

### 【作者名】

Dear

### 【あらすじ】

短編小説で意外に好評だったので連載開始！馬鹿みたいな死に方をした『神崎零』と閻魔様によるセクシーラブコメディー！パロディーやエロを含む作品なので、そういうのが苦手な方はご遠慮下さい。ちなみに、第一話は短編小説と同じです（笑）

そのいち 約束は守りましょう!?(前書き)

短編小説『セクシーバイオレンス』をご覧になられた方は、第二話からご覧下さい

そのいち 約束は守りましょう!?

毎日が楽しくて

毎日がつまらない

そんな矛盾した生活を俺は送っていた

俺は神崎 零かんざき れいという高校二年の普通の男だ

意識が確かで、視界が正常なら俺は死んでしまったのだろう・・・

何故なら・・・

「下でブツ倒れてるのはどう見ても俺だもんな・・・」

不幸というかな？

自転車に乗り、レンタルしたDVDを返した後だったよな？

同じ中学出身の友達である山井 紗香やまいさやかから電話があり、再びレンタルショップに行くハメになったんだ

別に暇だから良かったはずなのに・・・

偶然、落ちていたエロ本に気を捕らえられなければ・・・

「嫌な死に方だなあ・・・まさか、そのまま飛び出して来た車に引かれるなんて・・・」

「理解してるところで悪いんですけど？」

後ろを振り向くと、白い超ミニスカートの白い顔したスレンダーな少女が浮かんでいる

何コイツ？

幽霊？

とりあえず、下にいる比較的、傷の無い自分を見つめて見る

「どうしよう？体に飛び込む！とかしても無理そうだし・・・」

「聞いてます？おゝい聞いている！？」

とりあえず、この少女はシカトするしかないようだ

「おゝい！お兄さんってば！！・・・お兄さん安くしとくよ」

ピクッ！

心は正直だね？

一瞬、心が動きそうになるが俺は騙されん！（笑）

もしかしたら死神かもしれないし！

すると、少女はこう言った・・・

「生き返りたく無いんだ？ならいいや！」

その後、土下座で30分程説得（空中に浮かびつつ土下座は変か？）をして俺は少女と話してみた

「私はイチゴって言うの！よろしく」

「分かりやすい名前だなあ？んで、どういう用件で？」

「報告にあつた通りの方で良かったですう！実は今から良い所に私とイツて貰います」

良い所？

ミニスカの少女と良い所に？  
って事は・・・

「そんな事を言われても！まだ初対面ですし．．．」

「何を照れているんですかあゝ？早くイキましょう」

俺の妄想は膨らむ中で手を引っ張るイチゴという少女は凄いスピードで空間を移動する

従って、俺は凄まじい勢いで引っ張られる訳で．．．

10分後

俺は腕が見た事ないくらいに伸びて（幽体だから崩れやすいらしい．．．）一つの建物の中にイチゴと一緒にいた．．．

「神崎さん！もっと早く歩いて下さい！この先で御待ちになられるんですから！」

「待つてゐるって誰が？イチゴちゃん？何か俺を騙してな．．．」

ズゴッ！

話の途中で後ろから誰かに頭を蹴られる

「イチゴ！こんな貧弱な男が神崎なのか？そうなのか！？」

「そうよ？でも可愛いお兄さんよ？そのうちメロンにも分かるわよ？」

どうやら頭を蹴った女はメロンて言うらしい・・・

イチゴとは対照的に黒を基調としたやっぱりミニスカートの健康的に焼けた肌の少女

「おい？全然良い所じゃないぞ？」

「大丈夫ですう！すぐに良くなります」

「説明してないの？閻魔様の事？」

ちよつと待て？

今、言った言葉は『閻魔様』で間違いないだろうか？

間違いないとすれば、とんでもなくデカい化物に会わなきゃならぬのでは？

漫画の世界ならオシャブリをした小さな奴だけど・・・

「では、行きましょうか？神崎さん」

左腕をイチゴが掴む

「命令だし．．．仕方ないわね？来なさい神崎とやら！」  
右腕をメロンが掴む

引きずられながら状況整理をする．．．

壁に掛かっている肖像画とか見ても、デカい化物の様な『閻魔様』  
が描かれている

死んだなこりや．．．

あつ！もう死んでるんだった！

紗香に告げてない（万年片思い）のに死んでしまい、ミニスカの少女（よく考えると年は大して変わらなそうだ）に惑わされてココに来たら閻魔様にご対面！ パッパラパー！って全然シャレにならねええええ！

両腕を引っ張られながらも考え事していると、半端じゃなくデカイ扉の前に到着！

門番らしい二人のお兄さん（かなりのイケメン）にイチゴが笑って話しかけている

すると、どうだろう！

二人のお兄さん（よく見たら角が生えてる）は微笑みながら俺にさ  
さやいた……

「地獄に落ちろ！このフック野郎！」

ん？今なんて……

「グズグズしてんじゃねえよ！早くしねえと×××を×××にし  
てピーだぞ？このフッキンチビ」

放送禁止ワードどころじゃねええええ！

作者のノリです！すみません反省してます……

「ん？今、誰かがノリって言った様な……」

気にする時間もなく、口の悪いイケメン門番二人が扉を開くとイチ  
ゴとメロンに放り投げられる……

バコッ！

赤い絨毯の上に見事に腹を打ち、ご到着完了です

「グハッ！あの二人、力が強すぎ・・・」

「あの～？」

「しかしデカイ部屋だなあ？」

「おゝい？こつちに来てよゝ！」

「何か呼ばれてるから行くか・・・」

大きな部屋にある書類だらけの机

その向こう側にやたら美人でスタイルがよくて、この土地に似合わない笑顔の女の子が座っている

閻魔様ってこんなに美人な秘書を付けれるんだなあ・・・

かなり露出度の高い服を着ているが、顔とのギャップで常人なら鼻血で憤死しそうである程に美しい女性

「あの？閻魔様に会わされに來た神崎零ですけど？閻魔様はご不在ですか？」

テンパって軽く丁寧に質問してしまう

「ココにいますよ？神崎くん？」

「えっ？どこに見当たりませんか？」

「相変わらず面白い方ですね？目の前にいるでしょ？」

俺は今までの人生で一番というくらい思考が停止した

閻魔「デカい化物

目の前の彼女の発言×この部屋にいる自分以外の人物」閻魔

目の前の超セクシーな女性 先程の方程式による結果 目の前の彼女が閻魔様確定！

高校に入った時より今なら頭がまわりそうな程に脳が俺に答えを導き出す……

「閻魔様ってデカい化物みたいな方では……」

「それは祖父ですね！父親は私より小さいですし？」

「何故にそんなに露出度が高い服を？」

閻魔様が着ている服は上半身が胸の中心が大きく開いた赤く体にフィットする興奮度最高潮の代物である

下半身は普通の黒いエナメル状の代物だが、よく見れば側面が下着が見えないギリギリの所まで切れ込みが入っていて、その部分を薄い糸の様な金属でいくつもクロス状に合わせているセクシー過ぎる一品

長く黒い髪にとんでもなく大きな胸、ウエストは細くてヒップは程よく出ている

この俺、神崎零が求める最高のセクシーさであるのだああ！

「神崎くんの趣味でしょ？あれ以来、私は頑張ってここまで来たんだから！」

「さっきから気になっているんですが、初対面ですよね？」

次の瞬間に長い沈黙が部屋に流れる

そして……

「ひ、ひどいわ！私を忘れるなんて……うわああああん！」

閻魔様が泣いちゃったよ……

アレ？この泣き顔に何か見覚えが……

何て考えてると

「貴様！閻魔様を泣かせるなんて！やはり×××を×××にして  
ピーしてやる！」

イケメン門番二人がシンクロ率を最高潮で放送禁止ワードをいいな  
がら部屋に乱入！

俺、消滅される？

いや、まだだ！逃げちゃ駄目だ！逃げちゃ駄目だ！逃げちゃ駄目だ  
！逃げちゃ・・・駄目なのかな？やっぱり？

二度目の死を覚悟した時に、門番二人がの動きが止まる

さらに顔が青冷めていく・・・

「私の客人に手を出すなんて拷問されたいのかしら？」

先程まで泣いていた閻魔様が冷たく鋭い声を発する・・・

俺は怖くて後ろを振り向く事が出来ないが、禍々しいオーラを感じ  
る事が出来る

あまりの殺気にイケメンな門番二人は膝がガクガクになり、続いて腰を抜かした

結局、門番二人は気絶して寝転んでしまったのでイチゴとメロンが連れて行った……

未だに涙目の閻魔様が俺に鼻声で話しかける

「本当に私の事を覚えてないの？神崎くん……昔は零って呼べって何回も怒った癖に……」

「……あのくもしかして、まさかですけど……」

記憶が確かなら一人だけそんな事を言った女の子を知っている

「間違ってたらゴメンね？柳姉ちゃん？」

名前を呼ばれて天使の様な笑顔の閻魔様

小さい頃の記憶

初めて柳姉ちゃんと出会ったのは、五歳の時だった……

夕方に家出した愛犬の蓮れんを探していた時だった・・・

ワンッ！

蓮の声が聞こえたのは家から少し離れた公園だった・・・

子どもの足では遠い公園に中学生くらいのお姉さんと仲良く一緒にいたんだよね

「蓮！？探したぞ！こんなところにいた！」

「クウーン！（あっ！零！）」

お姉さんから離れて俺に飛び付き、顔を舐めまくる蓮

「うわっ！くすぐりたいよ！なんでこんなところに居たんだ？」

「ゴメンね？私が引き止めたの！」

「お姉さんはだれ？犬泥棒？」

「違うわよ？私は柳・・・閻魔えんまやなぎ 柳よ！」

閻魔の意味を知らない俺にとって、彼女はただの柳姉ちゃんとなった・・・

毎日、夕方にこの公園にくる柳姉ちゃん

すぐに仲良くなってしまい、俺は毎日が楽しみだった……

「神崎くんの夢は何なのかな？」

「神崎くんって呼ぶな！零って呼んで！夢はね……」

しばらくの沈黙の後に俺はとんでもない事を言っただ……

「セクシーな女の人と結婚する事！」

「ええ！？凄い事を言うわねえ？じゃあ……零が大人になったら私と結婚する？（笑）」

話は戻って閻魔の部屋

「零が何て言っただか覚えてる？」

「覚えてるよ……我ながらマセガキだったな……」

俺が言った答え

それは．．．

『柳姉ちゃんは綺麗だけど、おっぱいが小さいから駄目!』

それに対して柳姉ちゃんの答え

『ち、小さくないもん!普通だもん!．．．いいもん!見てなさい!もっと大きくなったら結婚してもらうから!』

とんでもない約束をした記憶だ．．．

小さい頃だから鮮明には覚えてないが、大体こんな感じだったはず．．．

「なんだ!覚えてるじゃない?約束通りに大きくなったわよ」

確かにデカイ

普通は胸が大きい人はタレるのだが、まるでその傾向がない上に形が良い何て．．．

閻魔様はやっぱり化物だな．．．

「そつえば柳姉ちゃんって、年をあまりとってないような気がするんですが?」

「そう?魔力のおかげね これでも170歳になったわ」

単純に10倍年上ってどうゆう事だ作者！

俺は普通に頭が悪いんだよ？単純で悪かったな単細胞高校生が！

「お楽しみのとこ悪いけど．．．零、いつ結婚する？」

「結婚！？俺、死んでいてそれどころじゃ．．．」

大事な話をしていたその時．．．

「ウィーッス！柳いるか？時間通りきたぞ？」

登場したのは渋めのおっさん

「いや、あんた誰？柳姉ちゃん？あのおっさん誰？」

「あの人？幼馴染みの鈴吉さん（りんきち）だよ？ちなみに職業は神様だよ」

うわぁ．．．何か知らないけど、神様が来たよ．．．

「一応、俺と零ちゃんは初対面じゃないけどな？ちなみにお前さんが事故った時によそ見たあの本は俺のだ！」

初対面じゃない上にあの本まで神様のかよ．．．

いい大人がエロ本持つてるなんて凄えな．．．

ってか、この世界にもエロ本あるのか？

「いやいや？あの本は地上で買ったんだ！何なら貸そうか？」

神様、心を読まないで下さい．．．

「鈴吉さんは最近になって神様襲名した期待の新人なの」

「四代目神様です！やっと継げたぜ！」

いや、興味ないッス．．．心を読んでいたら右手で頭をかいてみて下さい．．．

右手で頭をかきながら神様は話し始めた

「遊んでる場合じゃなかったわ！すぐに戻していいの？」

「いいわよ？すぐに地上へパイルダーオンお願いね」

「あの？俺は元祖超合金ロボじゃ・・・」

「この間の少年のお礼だ！マッハで地上に送ってやるぜ！！」

何か柳姉ちゃんに借りがあるらしいが、それはどうでもいいから普通に地上に戻して下さい・・・

神様の借りが知りたい方は『続・眠れぬ夜に』をご覧ください

作者よ？しっかり宣伝するな！

いや～！うっかりと宣伝してしまったよ？

どっちかというと、『ちゃっかり』だけだな？

「戯れている所で悪いんだが、準備が出来たぞ？」

作者のにひれ伏している間に地上へ帰る準備が出来たらしい

「コラッ！勝手に俺の心の声を変えるな！」

「零？時間がないからこっちに来て」

「ああ！ゴメン！柳姉ちゃ・・・」

柳姉ちゃんは近付いた俺にキスをした

「無事に帰れるおまじないよ．．．」

すぐに後ろを向いた柳姉ちゃんの声は心なしに鼻声だった．．．

「今度は私から会いに行くから．．．それまで忘れないでね？」

「．．．わかった！絶対忘れない！」

「んじゃ！良い場面で悪いが、入院中の病院へパイルダーオン！そして、スクランダークロオオオス！！」

「だから！俺は元祖超合金ロボじゃ．．．ウギヤアアア！」

気がつくところには病院だった．．．

片思いの紗香が泣きながら俺の体を揺すっている所に魂復活！

一週間後の学校

「紗香？何でそんなに顔が近いの？」

「また死にかけられたら困るからかな？」

病院で目覚めてやっと昨日に退院した俺は目覚めて以来、やたらべつたりの紗香に困惑気味だ……

「あのね？零くんに言わなきゃいけない事があるの……」

朝から告白タイム！？

ドキドキしていたその時である

ガラガラ

「みんな席に着け！今日は昨日に転校して行った山田×5に代わって、転校生が5名来て居る！しかもだ！美女が3名に美男子が2名だから期待しやがれ！」

待て！うちのクラスに山田は5名もいない！っていうか、元々うちのクラスに山田なんて人物はいねえ！！

嫌な予感がしてきた

そして教室のドアが開いて……

「閻魔 柳です」

「美味 イチゴです」

「熟下 メロン！」

「門前 右京じゃあ！」

「門前 左京じゃあ！」

「「よろしく！みなさん！そして、ただいま！神崎零！」」

クラスメイトの視線が一気に集中……

いきなり俺に飛び付いたセクシーに制服を着こなした柳姉ちゃんを見て、男子生徒が一斉に背中からバットを出した時に死を予感したのは言うまでもない……

ちなみに紗香を除く女子生徒はイケメン門番二人に目をハートにさせて、イチゴとメロンは先生に賄賂を渡していた……

柳姉ちゃん会いに来るの早過ぎじゃああああ！

セツトで来るなんて聞いてねえええ！

その後、バットで襲い来る男子生徒を避けていたら、紗香がどこから出したか分からない黄金に輝くハンマーで殴りやがってぶっ飛びました……

まだ生きていたのに、それを見た柳姉ちゃんが俺を守ろうとしてセクシー過ぎる胸で頭を抱き締めたので気絶しました……

「零ちゃん？こっちに来るの早いね？」

「あの～？神様助けてくれます？」

気付けば神様の前に来ていた俺に神様が答える……

「……作者が駄目だつてよ？つて事でパイルダーオン！」

「そげなあああ！」

こうして、破天荒な日常を送っていく神崎零であった……

「作者がまとめるなあああ！！そこは俺にやらせる！」

却下したところでさようなら！

それに 学校でのセクシーは違法です！？（前書き）

パロディーが多いですが勘弁して下さい

ご意見などがありましたら、作者までご連絡下さい！

それに 学校でのセクシーは違法です!?

今までの人生はそれなりに幸せだった・・・

セクシーという事がこんなに苦しい何て知らなかったから・・・

「れい！起きて」

うるさい・・・

今、気持ち良くなっているんだから・・・

「起きてよ・・・まあいいや！寝てる間に既成事実を・・・」

俺はキワドい所に手を置かれたので、大慌てで飛び起きる

「や、柳姉ちゃん！タイム！タイム！起きてるって！」

「同級生なんだから、柳って呼んで」

何故か俺は保健室のベットに寝ていた

後から聞いた話では気絶した俺を柳姉ちゃんが連れて来たらしい．．

恐るべし１７０歳．．．

「零は私と結婚するんでしょ？なら別にいいじゃん」

「いやいや！学校でなんてよくな．．．」

よくないと言いかけて息を飲んだ

セクシー過ぎる柳姉ちゃんの胸の谷間がパツクリと見えている

うちの高校の制服はブレザーなのだが、夏が明けたばかりなのでまだ上半身はカットシャツだけ．．．

更に、柳姉ちゃんは大き過ぎる胸のせいでボタンが中途半端な状態なのだ．．．

天使と悪魔が頭の中で戦い始めた．．．

「ここは学校だよ！ダメ、ゼツタイ！」

「いいじゃねえか！それに天使よ？それは覚せい剤やシンナーのポ

スターだ！」

言葉の牽制後、天使と悪魔の後ろに謎の人型オーラが出て来た・・・

「悪魔！私に勝てるとも思っているのか？URYYYYYY！！」

「フツ・・・天使は俺が裁く・・・」

ゴゴゴゴッ！

「無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ！！」

「オラッオラッオラッオラッオラッオラッオラッオラッオラッオラッオラッオラッ！！」

勝負は一瞬で決まった・・・

「グハア！馬鹿な！この天使が殺られるはずなど・・・ギャアアアアアア！！」

「敗因はただ一つ・・・テメエは読者を怒らせた！」

悪魔の勝利により頭のなかでコンディションレッドが発令！

この間、わずか三秒である・・・

悪魔いわく『時を止め返していた為』らしいが・・・

俺の頭の中で何かが弾けた！

「ムフフ！やゝなぎちゃゝん！」

空中に跳ぶと同時に下着以外の衣類が脱げる必殺奥義炸裂！（要するにルンダイブ）

だが、この奥義には大きな弱点がある

「零・・・来て」

お楽しみ開始直前！

「昼間から元気ね？一応、ココは学校なんだけど？」

保健室なので保険の先生乱入！

この奥義は高確率で失敗するのだ……

「うわっ！すみませ……貴女は誰ですか？」

お邪魔に入っただのは知っている保険の先生ではなく、若い少し危険な香りのするセクシーな女性だ

柳姉ちゃんを基準にしても引けをとらないスタイルは明らかに保険の先生ではない

まあ、柳姉ちゃんがとんでもない発言をして分かるのだが

「もう！邪魔しないでよ！早く孫の顔を見たいでしょ」

「子作りは計画的に！ってCMで言ってるでしょ？」

ん？おい？今、保険の先生に向かって『孫の顔が見たいでしょ』とか言わなかったか？

「あっ！零には紹介してなかったね？この人は私のママ」

「初めまして、母の閻魔 香織かおりです、よろしく。」

いきなり母親出たああああ！

「あの？保険の先生は……。」

「ああ、なんでも食中毒で一昨日から入院らしいの、今日から代理がわ・た・し」

嘘だな……恐らく何かの陰謀だろう

「ママ？何で邪魔をするの？」

「神崎くんが婿に適性が確かめに来たの。」

俺って婿入りなの！？ってか結婚決定なの？

柳姉ちゃんは寂しそうに部屋を出る

という事で二人っきりになりました

「あの？俺が結婚するのは決定なんすか？柳さんのお母さん？」

「もう！お義母さんだなんて、香織って呼・ん・で。」

いやいや、お義母さんとも呼んでないし！

しかも、一体、何なんだこの展開！！

「柳と結婚するって事は私の義理の息子になるって事よ？つまりは私のオモチャ．．．じゃなくて、ストレス発散を手伝って貰わないと」

そう言つて、何故か白衣を脱ぐ香織さん

「ちょ！な、何をしてるんですか！」

「大丈夫よ、私は未亡人だから」

大丈夫じゃねえええ！

とりあえず、この場から逃げなければ．．．

考える！考えるんだ神崎零よ！何かいい逃走プランはないか．．．

ポクポクポクポクポクポクポクチーン！

ハッ！ひ、閃いたぞ！これしかこの場から逃げる方法はない！

「あつ！あんな所でア　ディー・フグが踵落としをしてる！

「えっ！？嘘！どこでどこにいるの〜」

天国のアン　ィーさん．．．助けてくれてありがとう．．．

「神崎くん？どこにア　ディー様がいる．．．って！彼は亡くな  
ってるじゃない」

香織が気付いた時にはすでに遅かった

すでに保健室の前を通っていた田中Aと入れ替わった後だった

「神崎くんめ〜まんまと逃げたな〜」

「あの？僕、熱があるみたいなんですが．．．」

真っ赤な顔の田中A

まあ、理由は香織さんがセクシー過ぎる為であるが．．．

「あら大変！顔が真っ赤だ〜じゃあ、血液を抜いて真っ青になりましょ〜ね？」

その後、保健室から悲鳴が響いた事は言うまでも無い・・・

「いや〜！あんなところに身代わりがいてマジで助かった！」

そう言っただけ俺は教室に入っただが・・・

「『死ね！神崎！この裏切り者があ！』」

男子生徒によるギターのパック投げ攻撃

投げられたパックは黒板前まで来ていた俺が避けた為に、全てが黒板に刺さる

「な、何だあ！いつからうちの男子はギタリストになったんだ！？」

「零くん・・・保健室で転校生とイチャついてたってどう言う事

なの・・・」

異様な殺気を放つ紗香

何故バレてるんだ！？

「号外ですう」

「神崎は保健室で転校生とラブラブだ！」

イチゴとメロンが号外と叫びながら新聞を投げている？

よく見ると、俺がルンダイブした瞬間が新聞に号外されてる！？

「許せない！私がせっかく、勇気を出して告白しようとしたのに・・・」

「紗香！お、落ち着いて！これには訳が・・・」

そう、大きな訳があるんだよね・・・

「零は私のフィアンセだから怒らないで」

教室が大きな沈黙に包まれる・・・

「『何いい！』」

柳姉ちゃん！余計な事を言わないで！！

その言葉に明らかに怒りモードの紗香

「紗香！これには訳が・・・」

「ウオオオオ！グウウウ・・・」

ヤバイ！怒りモードから、まさかの暴走モードに発展した！？

「さ、紗香！待って！保健室では何にも無かったから！」

その時だった・・・

「神崎くん！私に放置プレイだなんて！ひどいわ！」

香織さん乱入ううう！

「「マジかああああ！つてか保健の先生までかああああ！」」

もはや逃げ場無し

「グルギゴガンゴオグフオ．．．」

「さ、紗香待て！俺は地獄と天国を同時に知りたくは．．．」

「零くんよ．．．光になああええええ！」

「ウギヤアアア！」

紗香は両手を前に出して、俺に突っ込まれて見事に瀕死状態です

「零？お母さんとはどう言う事？」

更に柳姉ちゃんによる援護攻撃！？

「零ちゃん？一日に二回も会うなんて凄いね？」

「あの？この展開ってやつぱり……」

本日二度目になる神様へのご対面

「分かってるなら説明いらないね？それじゃあ、フェードイン！」

「勇者ネタはもう止め……ウギヤアアア！」

零よ？勇者は勇者でも違う勇者だ！

「出てこないと思ったら話の最後で出てくるんじゃないかねえ作者！」

却下したところで更に破天荒な人生を送る事になる神崎零であった……

そのさん キャラとの約束は守ろう!?(前書き)

今回はセクシーよりもパロディーが強めになってますのでよろしく  
お願いします

そのさん キャラとの約束は守ろう!?

翌朝、ベットから転げ落ちて目が覚める

「フガッ!か、体が動かねえ . . . .」

そりゃ、そうだろ? 昨日は二度も死んでるんだからな?

「作者よ . . . .朝からうざい . . . .」

今日も死にたい?

「ごめんなさい!それだけにご勘弁を!」

しかたなく作者に平伏した俺は朝食を食いに一階のリビングへと向かった . . . .

「あつ！零！おはよー 朝食出来てるよ？」

「ありがとー柳姉ちゃ・・・」

ん？何故、柳姉ちゃんが俺の家にいるんだ！？

そして、何くわぬ顔して料理をしてるんだ？

「柳姉ちゃん？ここで何してるの？」

「えっ？だって夫婦になるんなら一緒に暮らさなきゃね」

同棲する気だぞ！この閻魔様は！

「そんなの両親が許さないと思うんだけど・・・」

「大丈夫よ？お義父様とお義母様は今朝から海外へお仕事に行つたわ」

・・・何iiiiiiii!!

「何かね？『息子がこないいい娘と結婚するなら安心して海外行ける！』って昨日の夜に言ってたよ」

「あ、あのエロ親父め！．．．そうだ！母さんは！？」

「お義母様は『女の子は大胆かつ、繊細に攻める事が大事よ！』って言ってたよ」

どんな親だよ！！！！

「とりあえずご飯できるから後、三分待っててね あっ！テーブルの上にお義父様とお義母様から手紙があるからね？」

料理を待つ間に親父と母さんが残した手紙をしてみる

『いろいろ大変だろうが柳ちゃんと頑張りなさい！あの世とこの世の国際交流や！親父より』

『女の子に恥をかかせちゃ駄目よ？ちなみに隠して合った本やビデオ、DVDは処理しときました！母より』

親父？某グルメリポーターじゃないんだから．．．

そして母さん？余計な事しないで・・・

「零？ご飯出来たよ！食べよ」

一般家庭の朝食が出されたのでひとまず安心して試食

「う、うめえ！何だこの目玉焼き！そして味噌汁！更に『ご飯！』」

「えっ？普通じゃない？よろこんで貰ったなら嬉しいけど」

家庭的な閻魔様なんて想像出来ないが、なんて素晴らしいんだ！

そして、制服にエプロンってなんて素晴らしいんだああ！！！！

朝から野獣化しかけてんじゃねえよ！

「うるさい・・・入院して以来、いろいろあるんだよ・・・」

要するにムラつと来てるんだろ？朝からサービスシーンは体に悪いぞ？

「作者さん　一緒に朝御飯食べます？」

あつ！いただきます！．．．うめえ！何だこれ！うまいぞ！

「いやゝ照れますよ　お礼に朝からサービスシーンが欲しいな？」

合点承知！

「コラッ！作者！朝御飯で買収されるな！」

うるさい！黙れ！人間は三大欲求には勝てないんだよ！

「はあ．．．俺、もう主人公止めたいわ．．．」

デンワダヨゝエンマニデンワダヨゝ

「何だこの着メロ？柳姉ちゃんの携帯？」

「そゝだよ　ちょっとゴメンネ．．．」

そう言うと、胸の谷間から携帯が現れる

「なぐにイチゴ？えっ？向かえに来た？分かったわ！五分待ってね」

そう言つて携帯をきると再び胸の谷間へ．．．

「ちょっと待てええええ！どこの世界にそんなところから携帯を出し入れするやつがいるんだよおおお！」

「ん？私とママはここにしまっけど？何でも入るし」

「柳姉ちゃんの胸は四次元ポットか！？」

「確かめてみる？」

ん？待てよ？確か某漫画でこんなシーン有ったよな．．．

そこは触れてはならない領域だぞ？作者を困らせたいのか？

作者が困ると色々と大変なので（切実）とりあえず学校へ行くことにした．．．

教室に入ると、何故か門番二人組である左京と右京に拉致られた

「零っち！俺たち悩みがあるんだ！」

「零やんなら相談ができるんだよ！」

とりあえず、変なあだ名を付けるな！

「んで、二人揃って悩みってなんだよ？」

二人は少しの沈黙の後に叫んだ

「「何の部活に入ろうか悩んでるじゃ！」」

ぶ、部活かよ！！

「俺はボクシングをしようかと思ったのだが・・・」

おい！左京よ？お前がボクシングしたらヤバいだよ？

「左京がボクシングをするなら、俺は野球で甲子園を目指さないとならんだろ？更に交通事故で死ぬのは嫌なのだ・・・」

待てええええ！それじゃ、某青春漫画になるだろおおお！

「とりあえず、二人ともその案は却下！」

「「ちょっと！ちょっと！ちょっと！」」

コラッ！漫画にかけて『ザ・つち』をするな！

「お前らが体育会系の部活したら駄目だろ・・・」

「「何で！何で何で！？」」

だから止めろって！

「お前ら二人が体育会系の部活に入ったら、先輩の理不尽な事をさ

れた瞬間に半殺しだらうが！」

「なるほど！それは一理あるな……」

「左京よ？零やんに相談して正解だな！」

ふう……とりあえずは一安心だな……

「アレレ！こんなところに何か紙が落ちてるよう？」

今度はコ ン君かい！

「なんだそれ？なにになに……」

その紙にはこう書かれてあった……

『生徒会委員募集中！学園を動かすのは己じゃ！この野郎！』

何だこれ？

「零！それなに？それも部活なの」

いつの間にか、後ろに来ていた柳姉ちゃんが尋ねる

「生徒会はこの学校の生徒による学園方針とか決めるやつだよ？うちの高校は校則が自由だから、毎年のように下らない校則が生徒会により増えてるよ！」

その言葉に目を輝かす柳姉ちゃん

「私！立候補するわ！そして、校則で零との結婚を成立させる」

バアアアカアアア！

何て事を考えるんだこの閻魔様は！

うちの高校の校則は絶対だ・・・

だから、毎年のように下らない校則が出来るのだ・・・

例題 1

伝説の木を中庭に設けて、卒業式の日女子生徒から告白して成功すると最高にハッピー

例題 2



そうだ！そうだ！

「いゝえ！ダーリンはウチのモノだっちゃ！」

ん？何かおかしいぞ？

「あ　る君！この女のどこがいいの！？」

う、う　星やつら！？

よく見ると、柳姉ちゃんも髪が緑で虎柄の水着らしきモノを着てるし……

「さ、紗香？何を言ってるの？俺は零だよ！」

親切かつ丁寧に言った零の発言だが、すでに前回で頭のネジが吹き飛んだ紗香には通用しない……

「作者ああああ！お前の陰謀かああああ！」

気にするな！これは朝食のお礼だ！

「あ　る君？この女がそんなにいいのね．．．」

あつ！まだ暴走してるのね？もういいって！

「当たり前っちゃー！ウチは昨日からダーリンと暮らしてるっちゃー」

「キイイイ！あ　る君の浮気者おおおお！」

そう言つて教壇を担ぎ上げるし　ぶ．．．

「作者！勝手に話を進めるな！」

文句いつのはいいけど、その前に避けたほうがいいんじゃない？

俺は前を見える

あれ？世界ってこんなに茶色っぽかったか．．．

グチャ！

紗香の教壇投げ！零の急所に当たった！効果は抜群だ！

「さ、作者よ．．．か、漢字で書い．．．ても．．．ポケン  
のバレバレや．．．」

あっ！マジで？

「ダーリン！しっかりするっちゃ！起きるっちゃ！」

もういって．．．マジで．．．

「こうなれば、電気ショックしかないっちゃ！」

いやいや！さすがに閻魔様でも、それは無理でしょ？

そうでもないぞ？さっき両腕に、イチゴとメロンがスタンガン  
を渡してたから！

えっ？マジで？

「ダアアリイイン！！起きるっちゃ！」

スタンガン！スイッチオオオン！

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アア・・・」

「あれ？零ちゃんまた来たの？いらっしやうい！」

「俺の意思じゃないけど来ました……邪魔します……」

毎度お馴染みの神様の自宅にご訪問

「なあ？作者？いつもオチが神様の前だと、俺は後、何回死ぬんでしょっ？」

あははっ！鈴吉？もっと出番欲しい？

「ボクは欲しいな！じゃんじゃん死んで貰わないと！」

だそうです！

「うぜえ……」

「まあまあ、落ち着いて！んじゃ、いつもの時間だ！チェーンジ  
ツター！スイツチオオオンポチツとな」

「今回はゲッーかよ！ウギヤアアアアアアアア……」

次の日まで零の顔は紗香にやられた影響で、見事に変形・合体していたという……

「マジで！？って合体は無理やああああ！」

そのよん ドキドキ！新生徒会長決定トーナメント・前編！？（前書き）

なんか今回は無茶苦茶になっていますので読みにくいかもしれません！

そのよん ドキドキ！新生徒会長決定トーナメント・前編！？

『愛犬』

その言葉は、自分が飼っている犬が大事な家族の一員である事をさす……

家族であり、兄弟であり、時に恋人以上の存在

それが『愛犬』

「うゝん……」

体が痛いよ……

俺はまた死んだんだよな……

「神崎くん？大丈夫？」

俺が香織さんの声で目を開けると、そこは保健室だった

「ああ、生き返ったのか……」

「意識が戻った！それじゃ早く準備しなさい」

「はい？準備……って！香織さん！？」

香織さんはラメの入ったセクシーな衣装を身に纏い、前傾姿勢で俺の前にいる……

柳姉ちゃんの親である香織さんは、柳姉ちゃんに引けをとらない爆弾ボディーの持ち主な訳で……

「胸が気になる？か・ん・ざ・き・くん？」

うわっ！見てたのバレてる……

男性読者諸君！意外に女性は見られてるのに気付いてるからね！ガン見には気をつけて！

「そうよ？見過ぎるのは駄目よ？でも、全く見ないのは罪よ！」

さすが！セクシー路線の美女は違うね！

「作者ああああ！この妙な雰囲気は何なんだああああ！」

えっ？前回の展開からの続きだろ？

「前回の続き！？う　星やつら状態からの？」

その前は何だった？

「その前？確か・・・柳姉ちゃんが校則で・・・」

「あら！覚えてる～！今から、生徒会長を決めるトーナメントが始まるのよ～！」

トーナメント？

なんだそれ？

校則の一つにあったよね？『最終決戦は我が高校が認定したリングの上で時間無制限一本勝負で行う事』って？

「おい！待てええええ！何故、最終決戦なんだ！そして、前回のオチからすれば俺は明日まで顔が変形・合体をしてるんじゃないのか

「！」

顔の事はゲツ  
ーにかけた単なるネタだ！本当に変形・合体して  
いて欲しいか？

あれ！？急に何か顔に違和感を感じて・・・

「あら？神崎くん？顔が分離しそうよ」

おい！ちよつと待てええええええ！

どうした？期待通りき変形・合体のシステムを導入したぞ？すぐに分離から新しい顔に変形するから待ってるよ？

結局、作者に対して土下座で30分謝るハメになりました……

「それで、なんで俺が準備しないといけないんですか？」

香織さんに尋ねる

「新生徒会長トーナメント表に〴〵名前が書いてあったからよ」

「ええええ！マジッスか？ダリイ．．．」

「私は解説になったの〴〵！本当は参加したかったな〴〵．．．」

香織さんは先生でしょ！

「さすがに無理だったわね〴〵？でも、出たかったな〴〵賞品が神崎くんだからな」

はい？今、香織さんは何て言いましたか？

トーナメントの賞品は神崎零の所有権利なんだよね！

「作者ああああ！どいう設定か説明しやがれええええ！」

結局、紗香と柳の望みは『零』の所有権利なんだよね？だから、生徒会が面白いからって新生徒会長トーナメントを開いたんだ！

意味が分からねえ！

一応、お前の人権を尊重してトーナメントに参加が決まったから！

マジかよ．．．

とりあえず、俺は特別リングがある島高校地下格闘技場へと向かった．．．

「アレ？零！遅かったね？気がついたんだ」

「私と柳さんは一回戦が終わったわよ？次は零くんよ？」

試合を終えた柳姉ちゃんと紗香がそこにはいた．．．

ちなみに、二人は圧勝したらしい．．．

対戦者の遠藤Aと加藤Aは瞬殺されて、ちょうど今、俺の横をタン力で運ばれている

「お、おっぱ．．．い最高や．．．」

「お、女勇者．．．萌．え．．．」

うわ．．．

二人とも鼻血で顔がかなり赤いよ．．．

どんな勝ち方したんだろうか．．．

想像力に任せるよ！それより、お前の対戦者が向こうから来たぞ？

作者に言われた方を見ると、この学校で見た事の無い女の子がそこに立っていた．．．

「神崎零！」

「ん？君は誰？」

全く知らないのに名前を聞かれて戸惑う

「．．．！神崎零！殺す！」

うわ．．．何か怒ってる．．．

何してんだ？早くリングに向かえよ？

言われるままに俺は試合をするハメになりました・・・

「それでは、青コーナーより神崎零選手の入場です！」

お前は誰だああああ！

リングアナウンサーにいちいちツッコミを入れるな！さっさと行  
きやがれ！

しかたなくリングへと上がる俺

「赤いコーナーより、匿名希望選手の入場です！」

ちよつと待てえええええ！

今度は何だ！

うちの高校の生徒が何故、匿名希望になるんだああああ！モロにドラ ンボールじゃねえか！

パロディーだから気にするな！この娘は転校生だ！シャイだから最初は匿名希望なんだよね？

「神崎零・・・本当にボクを分らないのか？」

「悪いけど、全くわかりません・・・」

匿名希望選手がそれを聞くと同時に試合のゴングが鳴った

彼女は心なしか細かく震えている

匿名希望選手は腕やウエストなどは細いのだが、出るところは出ているかなりの美女

彼女は震えていたかと思うと、いきなり大声で俺に向かって叫んだ

「あんなに好きだといってくれたのに！」

一瞬、場内が沈黙に包まれる・・・

「「「何iiiiiiiiiii!」「」」

「零くん？試合が終わったらちょっといい？」

観客と紗香から殺気が満ち溢れている

まるで、某格闘ゲームの 鬼みたい・・・

何か、今ごろ神様が『おっ！出番が来る？』って言うてそうだ・・・

柳姉ちゃんは頭を傾げているだけで、不思議と怒ってはいない

「いきなりですが、実況の現生徒会長です！この状況は一体何なんでしょうか？」

「こちら解説の香織です！波乱の匂いがしますね？」

しばらくバトルが集中する為、実況と解説でお楽しみください！

「ああ！神崎選手！身軽なフットワークだ！匿名希望選手を近付け

させなああい！」

「さすが、神崎くんね！でも、避けてばかりじゃ相手は倒せないわよ？」

「そうですね！うおお！匿名希望選手の左ボディーが見事に入ったあああ！更にフェイントからのガ　ルパンチだあああ！」

「ここまでくれば、デンプシー　ールに来るわね？」

「なるほど！香織先生の解説通りに」の形に体をウィービングさせていく！」

「やつぱりね？作者はかなり好きだからね」

ちよつと待てええええええ！どこの世界にデ　プシーロールを使える女子高生がいるんだあああああああ！！

鈴吉が『出番まだ？』って言つてたからね？逝つてくれよ？

簡単に死んでたまるか！コノ技は距離を詰めるか、離れれば対処できるはず……

「ボクのコノ技はデ　プシーロールじゃないよ？九ヶ所の死角を同時に殴り付ける技……名付けて『九頭龍拳』だあ！」

作者ああああ！という設定だああああ！どう考えても、『九龍閃』だろおおおおお！

てへ

コラッ！『てへ』ですますな！

ぷうくだ！

駄目だ．．．作者が壊れている．．．まるで、某猫型ロボットが異常を起こした時みたいだ．．．

「神崎零！ボクを忘れた罪で死んじゃええええええええええ！！」

俺．．．死ぬのか？

また死ぬのか？

俺はまだ．．．

「ハアアアア！俺はまだ死ぬ訳にはいかないんだよ！」

な、何！ここで一回死んどけよ！？

作者の戯言を無視した俺は高速で突っ込んでくる彼女に向かっていく……

そして、体に違和感を感じる……

全てが止まって見えるし、体が素早く動ける……

気がただけだった……

グチャ！バギッ！プチュ！メシメキバゴ！

うわっ！矢部！じゃなくて、やべ！

「ハギヤアアア……同時に……九ヶ所の……急所……攻……  
撃は……」

あっ！死んだ？

「なんとか……生きて……る」

俺は全身が同時に痛いので無意識に前にいる彼女を掴んだ

「うわっ！止め．．．」

アレ？この緑色の目を俺は知っている

そうだ．．．彼女の名前は．．．

「ボクを離せ！トドメがさせないだろ！」  
「ずいぶ．．ん．．大きくな．．．たな？」

その言葉に体をビクツと震わせる彼女

あの緑色の強く優しい瞳の持ち主を俺は知っている．．．

五年前、俺の前から急に消えた彼女

悲しい時は一緒に悲しんで、楽しい出来事は一緒にした

最初は女の子なのに気付かなかったりしたんだよな．．．

「ボクの事、分かるの？思い出したの？」

「ああ．．．君は蓮なんだろう？」

その言葉を聞いた彼女は涙を流した

彼女は間違い無く『蓮』らしい．．．

「大会執行部！ボクは棄権する！」

「蓮！お前、何を言っ．．．」

俺の台詞の最中に現生徒会長がリングへと上がって来た

「正当な理由が無ければ棄権は認められないのだが？適当な理由の場合、決着がつくまで戦ってもらう！一応、校則なのでね？」

蓮は俺を抱え上げて大声で叫んだ．．．

「ボクは大事な家族をこれ以上傷つけられないんだよ！」

蓮．．．何て優しいんだ．．．

すでに傷つける隙間も無いけどな？

作者ああああ！良いシーンが台無しだろがああああ！

「家族．．．にしては、神崎選手は貴女を家族と気付かなかったみたいですが？」

しかたないだろ？元は犬なんだから．．．

「そ、それは．．．」

「ん？それは何なんです？早く答えて下さい！今すぐに！」

こんな状況の中、リングの外から蓮に声かけられた

「あつ！蓮ちゃんだ！姿が変わってて分からなかったよ」

声をかけたのは柳姉ちゃんである

「あつ！貴女は！お久し振りです！」

「何年ぶり？大きくなつたね？」

「閻魔選手？知り合いですか？」

「ええ 蓮ちゃんも零が五年前に生き別れた妹よ？つまりは、私の義妹という事よ？」

いや、兄妹じゃねえし！柳姉ちゃんの義妹でもない！

現代社会にとって、義妹は大事な存在だ！口を挟むな！

俺の人権を無視かい？それに作者よ？現実と妄想の区別はつけろよ！

ぐっ！痛いところを突きやがる・・・お前の心の声で、義妹萌えの読者が傷ついたぞ！どうしてくれる？

俺は義妹で萌えないからいいが、読者の方ごめんなさい・・・

素直でよろしい！

「閻魔選手・・・君の発言を信じよう！ただし！今回は特別の処置だ！次は無いぞ？」

「零と蓮ちゃん？いいわよね」

「ボクは構わない！」

「当たり前だ！俺も構わないよ！」

現生徒会長は俺と蓮の顔を見て頷く

「ふむ！では、第三試合の勝者は神崎選手！」

こうして試合は終わり、俺は蓮と柳姉ちゃんに連れられて控え室へ  
と行った……

「柳姉ちゃん？何で彼女が蓮って気付いたの？」

「だって、蓮ちゃんから懐かしい妖気を感じたんだもん」

えっ？妖気！？

「今まで黙ってたけどボクは新種のケルベロスなんだ！」

黙ってたというか、俺は犬と普通に会話は出来ないです！

「新種のケルベロスだから覚えてたの 一定の年齢になるとケルベロスとして成長するか、強靱な力を持つ人間になれるのよ？妖気だけは消えないけど」

うわぁ・・・何て都合のいい設定・・・

やかましい！そろそろ天に帰れ！

嫌だね！今回は珍しく死んでないんだ！少しは気を使え！

「あのさ？ボクって住む所が決まってないんだ・・・また、家に帰って来てもいいかな？」

「もちろんだよ！蓮は俺の家族だ！おかえりなさい！」

「うん！ただいま！零兄ちゃん！」

いや、『兄ちゃん』は違うだろ？

とか言ってる癖に顔が赤いぞ？嬉しいならはつきりしろよ？

うっ！痛いところを突くんじゃない！

まあ、従順な義妹なんて国宝だから大事にしるよ？

「零？鈴吉さんからメールで、『僕の出番ないのか？』だって」

「今回は無さそうだって返事として！全く・・・人の命を何だと思ってるんだ？」

「零兄ちゃんタフだから簡単には死なないよ？」

そうそう！今までは常識を超えてたから死んだだけなんだ！

「私はそんなタフな零が大々好きだよ」

そう言つて、俺に抱き付く柳姉ちゃん

「あっ！柳さんズルイ！ボクも大好きだ！」

そう言つて後ろから抱き付く蓮

とても嬉しいのだが、そのタイミングで紗香が控え室へとご入場

神崎零の天国までのカウント開始！

「零くん？これはどういう事？」

「さ、紗香！？これには事情が……」

カウント・3

「何でなの？何で他の女ばかり……」

カウント・2

「さ、紗香！ちょ、ちよつと待て！」

カウント・1

「ゴル イオンハンマー……発動承認……」

「待てええええ！一人で承認するな！つて、柳姉ちゃんと蓮も避難



「別に地上に來なくていいッス．．．今より混乱しますから！つてか、オプションって一体何ですか？」

何か嫌な予感．．．

「時間ないから行くよ？ロード　ーラーだあああああ！」

オプション出たあああああああ！！

あはは！ロー　ローラーに潰されてる！

「り、鈴吉さん？これ苦しいだけ何ですけど．．．」

「今からが本番さ．．．」

そう言った鈴吉さんはロード　ーラーに飛び乗る！ま、まさか．．

「無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ！」

「痛いっ痛いっ痛いっ痛いっ痛いっ痛いっ痛いっ痛いっ痛いっ痛いっ！鈴吉さんちよっ

と待つ・・・ウギヤアアアアアアアアアア！」

こうして零は無事に地上へ帰ったとさ！

そのこ ドキドキ！生徒会長決定トーナメント・後編！？（前書き）

気付けば、アクセス数が750を超えてました！読んでくれた方、  
本当にありがとうございます 早く更新できるように頑張ります！

そのこ ドキドキ！新生徒会長決定トーナメント・後編！？

女同士の戦い

それは時に、男同士の喧嘩より激しく壮絶なものである・・・

美しいバトルやドロドロとした執念のバトル

女性は男性を癒すと同時に最大の恐怖を生み出すのだ・・・

「零くん！起きてよ！私が悪かったよ！お願いだから起きてよ！」

アレ？紗香の声が聞こえる・・・

この世に帰ってきたんだよ！鈴吉の『ロードーラーからの無駄

無駄コンボ』でね?」

作者よ?読者がジ ジョを知らなかったらどうするんだよ?

駄目かなあ?俺には北斗神拳レベルでツボに入るんだが・・・

コラッ!北斗神拳はツボじゃなくて秘孔だ!

いちいちうるさい主人公だな?サブヒロインがお怒りだよ?

俺は作者の声により目を開けてみる

「あっ!ヤバッ!零くん気がついたの?」

「お陰様で天国から戻ってきましたよ?つか、紗香?何を後ろに隠してるの?」

目が悪くなければ、明らかに黄金色に輝くハンマーが背中からはみ出しているのですが・・・

「えっ?な、何も隠してないよ!?」

「前から気になってたんだけど、ゴルフオンハンマーって、どこに売ってるの？」

「き、企業秘密よ！ってか、別に零くんに言う必要ないでしょ！」

えっ？これ何？軽く逆ギレですか？

いや、ツンデレじゃないの？

マジで！？これってツンデレでいいの？

いや、俺はあまり分からん分野だから・・・

「零くん？作者とばかり話してないで私とも話してよ？なんか寂しいよ・・・」

多分、ツンデレだあああああああ！

感動中に悪いけど、柳が来たぞ？

「あっ！零、生き返ったんだ！おかえり」

「あつ！柳姉ちゃんただい……」

突然、会話の途中で紗香が、持っていた黄金に輝くハンマーで俺に近付こうとした柳姉ちゃんを遮る

「柳さん？このトーナメントは『神崎零』を賭けて戦っているのよ？同棲していても、簡単には接触をしてもらっては困るわ！」

えっ？そうなの？賭けの対象である俺ですら聞いてないぞ？

「そうなの？でも、紗香ちゃんは零と接触してるじゃん？」

柳姉ちゃん？心なしか怒ってますか？いつもの『』が消えてますけど……

「私が零くんを殴ったのだから、看病する権利はあるわ！校則の中に『行動には自らの責任を持ちましょう！』とあるのを知らないのですか？」

紗香？目が笑ってないのですけど？

「ごめんなさいね わ・た・し、転入したてだからまだ知らなかつ

たの．．．だから、今回は引くわ」

あつ！何か良い方にまとまりそう．．．

「でもね紗香さん？私を怒らせた責任はまだとって貰ってないわよ」

柳姉ちゃああああああああん！？あなた無茶苦茶怒ってらっしやるじゃん！全然、引いてないでゲス！

コラッ！一人で勝手にテンパるな！アクセス数が750を超えたからっていつも通りにすればいいんだよ！

思わず作者の声でハツとする．．．

「柳姉ちゃん！紗香！落ち着いてよ！この小説はコメディー何だから！」

俺は柳姉ちゃんと紗香へ真実を伝えた

すると、二人はゆっくりと俺の方へ首を回して言った

「「うるさい！脇役は引っ込んでろ！」」

すみませんけど、へこんだ零に代わって私と鈴吉で進行をしますね？

イエーイ！今回は出番が無さそうだから進行担当の鈴吉だ！

零がへこんでいる間に二人の準決勝が始まりそうだね？

閻魔vs女勇者なんて滅多に見られないよお客さん！

そうだね！学園祭に来た芸能人のダサイ私服並に見れないね！

作者よ．．．それ、結構見れるよ．．．

へこみながらツツコミを入れるな！鈴吉の出番が消えるだろ！

そうだ！そうだ！今回は珍しく出番が早いんだから、もう少しへ  
こんでいてよ！

俺に文句言っている合間に試合が始まってるぞ．．．

「柳さん！勇者をナメた罪は重いわよ！」

「紗香さん？勇者ならもつと広い心を持つ事ね」

おおっと！ここで紗香が先制の左ジャブを連発だああああ！

左を制する者は世界を制する！さすが女勇者だ！

「さすがね紗香さん？でも、私の胸の前では全く無駄よ」

ポヨンッ

な、何と！セクシー過ぎる胸で拳の力を吸収している！

まさに『セクシーバイオレンス』だ！揺れる胸の動きを見た男子生徒が前屈みになっている！

「今度は私の番ね？行くわよ紗香さん 闘魂入魂乳ビンタ！」

「ひでぶっ！．．．殴ったわね？パパにも殴られた事ないのに！」

「お嬢さんのさ！そんな事で私を倒せると思っているの」

「いいわ．．．とっておきの技をしてあげる．．．」

ここで紗香がバク転をしながら赤コーナーに向かう！

そこからトップロープまでバク宙で飛び上がった！プロレスラー顔負けの身体能力だ！

「食らいなさい！うわあああああ！」

「何！？そこから更に高く飛んだわ！自殺行為ね」

「私の根性をナメないで！必殺！スーパーイナ マキイイック！」

作者ああああ！生身の体でガン スターとはどういう事だあああ  
あああああ！

あつ！復活した！

アニメネタには食い付きが早いね？

うるさい！あんな技を食らったら柳姉ちゃんでもヤバいだろ！

あつ！柳に当たった！

ズゴオオオン！

「や、柳姉ちゃあああああああん！」

気付いたら俺は叫んでいた・・・

理由なんてない

ただ、心の底から気付いたら声が出ていたんだ……

無残に弾け飛ぶ柳姉ちゃんに、紗香は両腕を合わせて渾身の一撃を構え、凄まじい勢いで突っ込んで行く

「止どめよ！地獄と天国を知りなさい！」

「ぎ、残念ね……。私は両方とも、よく知ってるわ……。」

そう言った柳姉ちゃんは一瞬、俺の方を見て微笑んだ。

一体、何をするつもりだろうか……

「イクわよ 閻魔流殺人拳秘奥義！ 快樂絶頂流舞拳！」

何かヤバそうな技が出たあああああああああああああ

僕が説明しよう！快樂絶頂流舞拳とは、超高速で相手の複數力所にある秘孔を突き、その衝撃で触れる物全てが快樂へと変わる恐るべき技だ！食らった者は絶頂するまで体中を快樂が舞い、常に快樂が流れ続ける正にセクシーバイオレンスと言える技だ！

鈴吉さんのやたらに長い説明なのだが、柳姉ちゃんと紗香は無視してお互いに突っ込んで行く……

「柳さん！勝利するのは勇氣ある者よ！消えて貰うわ！」

「紗香ちゃん違うわよ？ヒーロー系の話なら確かにそうだが……でもね？これはエロスが混ざるラブコメよ？勝利するのは愛とセクシーよ」

信念を言い合い、激突した二人を中心に大きな光と爆発音が放たれる

「うわぁ！……柳姉ちゃん！紗香！」

リングの上にはお互いの技を食らった両者が距離をとって立っている

「み、見事ね 紗香ちゃん……」

そう言った柳姉ちゃんは服がビリビリに破けて、ほぼ下着のみ！？

「いえ……柳さんには負け……アァン！アンツ……わ、我が一生にいん、一片のおん、悔いなああああんし……！」

悶えながらラ ウきたああああああああああああ！！

両者共に、服がヤバい事になってるね？男子生徒全員が体育座りになってるよ！

そりゃなるよ．．．元氣いっぱい的高校生なら．．．

アレ？零ちゃん？前屈みになってるよ？

ノーコメントでお願いします．．．

「この勝負ゝ勝者はゝ柳で決定ねゝ？山井さんはラ ウのポーズで昇天してるし！」

「香織さん！昇天って言わないで！せめて、気絶とか言って！」

「いいじゃない！あらゝ？神崎くゝん？前屈みになってどうしたの？」

「ん！？いや、これはですね？あの．．．そっいえば、現生徒会長はどうしたんですか？」

零ちゃん、話をはぐらかしたよ（笑）

う、うるさい！鈴吉さんには言われたくない！

俺は隠さないもん！正々堂々と生理現象に立ち向かう主義だから！

「神崎く〜ん！現生徒会長はね〜、急にお腹が痛くなってトイレに行ったよ〜！」

そういえば、一部男子生徒がいない！多分、痛くなったのは腹じゃないだろうな・・・

「零！私、試合に勝ったよ！零のおかげで」

「俺のおかげ？俺は、何もしてないけど？」

柳姉ちゃんは頬を少し赤く染め、軽く涙を溜めて言った

「零が私の名前を叫んでくれたから頑張れたの！」

「もう！柳姉ちゃん！泣く事ないだろ？」

「いいの！だって私も女の子だもん」

一瞬、心がドキッとなってしまった

柳姉ちゃんって、こんなに可愛かったかな？

「神崎く〜ん？何か、あなたの対戦相手が、鼻血を出して気絶したんだって〜！だから不戦勝らしいわよ〜！」

作者ああああ！一体、何なんだ！その手抜きみたいな状況は！

零ちゃん！作者はさっきから、用事があるとかでいないよ？

何いいい！いつからいないんだ！？

えっと・・・スーパーイスマキックが当たった後から？

マジかよ！ってまさか！だから、鈴吉さんが説明してるのか！？

イエス！ちなみに決勝は明日だって！

この話まだ続くのかよ！

「零？悪いけど、明日は敵ね？私、今日は先に帰っておくわ　紗香ちゃんによろしく！」

そう言っって柳姉ちゃんはどこから出したか不明の体操服にブルマという服装で家に帰って行った……

「ん……はあ！アレ？私、なんで保健室に！？」

「あつ！紗香！気がついたの？お疲れ様！」

「キャッ！……なんだあ！零くんか！驚かさないでよ？」

「ああ、ゴメン！大丈夫か？まだ、その……体は変なの？」

「うん……少しだけね……私、負けちゃった……」

うつむく紗香

凄く悲しげな表情をしている……

「紗香．．．ん？なんだアレ？」

「何？どうかしたの．．．」

俺が見ていた方を見た紗香の柔らかな頬

紗香の目線が横を向いた時、俺は紗香の頬を目掛け、そつとキスをした．．．

「キャッ！な、何！どうしたの零くん？」

「ん？早く元気になるおまじないだよ？元気になったでしょ？」

「．．．．バカ」

紗香は顔を真っ赤にして横を向いた

まだ、技の余韻が残っているらしく、少し目がトロロンとなつてしまったけど、彼女はどことなく嬉しそうだ

そんな紗香を見ていた頃に、まさか作者がとんでもない方に会っているとは家に帰るまでしらなかったのだが．．．

そのろく リトルジョン大佐の悲劇！イチゴの誘惑とメロンのヤキモチ！？（前

アクセス数が1000件を突破しました！

読者の皆さん！ありがとうございます

作品にご意見・ご要望があれば作者までご連絡下さいm（　　）m

そのろく リトルジョン大佐の悲劇、イチゴの誘惑とメロンのヤキモチ！？

## 輪廻転生

生物は命を失うと、新しき命へと生まれ変わる．．．

また同じ生物になることがあれば、全く違う生物になることもある

ただ、前世に罪を持って生まれ変わったものは、罪を償う為に醜い姿で誕生することもあるのだ．．．

その罪を全て裁く者

それが『閻魔』

紗香が回復したのは軽く夕日が沈みかけていた頃だった

俺は紗香の体を心配し、蓮と一緒に家へと送って行った

「零くん、もういいよ！家まで後少しだから！」

「気を使うなよ？折角だから家まで送らせてもらいます！」

「零兄ちゃん優しい！さすが、ボクのお兄ちゃんだよ！」

何かこの展開は凄く照れるなあ！

幸せだなあ……

作者は出てないし……

「零兄ちゃん？何をボーとしてるの？」

「エッチな事でも考えてたんでしょ？（笑）あっ！家に着いたわ！」

「ち、違う！俺も、たまには考え事くらいするよ！」

紗香の軽い冗談に和んでいたその時だった……

「神崎さ〜ん！迎えに来たよお」

「悪いが来て貰うぞ！いいな？神崎！」

突然現れたイチゴとメロンが俺を超人的なスピードで強制的に拉致

！？

あまりの出来事に紗香と蓮は呆然と立ち尽くし、俺は強制的に彼女達から離れていく

「ちょー！痛い痛い痛い！イチゴ！メロン！いきなり何しやが．．．

」

俺は文句を言おうとしたのだが、超高速で移動するイチゴを見て思わず息を飲む

イチゴの私服と思われる白いフリフリのミニスカの中から『いちご柄』がちらちらと見えているのだ．．．

「あれ？神崎さん、急に大人しくなりま．．．って！いやーん！神崎さんのエッチ」

あっ！バレた！

「か、神崎いいい！この鬼畜外道があああ！」

俺、パンチラを見ただけで酷い言われようだな．．．

「神崎！女の敵め！ハラワタをブチまけろっ！」

アレ！？メロン！いつの間に鼻に大きな傷が出来たんだ？

ってそれどころじゃないよ！ハラワタ出されたら生き返られないよ！

「ちょ！タイム！タイム！メロン落ち着けて！」

と言いながら腹を強固にガード完了！

「下の名前で気安く呼ぶなあああ！」

ガードを突き抜ける強烈な膝蹴りがクリーンヒット！

俺は地面へと崩れる

「い、今更ですか？最初からそう言．．．」

文句を言おうとしたのだが、下からメロンを見てしまう形なので必然的にメロンの黒いミニスカの中がモロに見える訳で．．．

「神崎．．．とりあえず死ね！」

あつ！バレた！

「待て誤解だ！ってか、不可抗力だし！全て俺のせいじゃないし！メロンの下着が紫のレースとかでラッキーとか全く思っていないし……」

あっ！言っちゃった！

少し沈黙したメロンは分かりやすい怒りマークをおデコに表している・・・

[illegible]

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

メロンは俺のモウレッツに大事なりトルジョン大佐（敬礼中）を蹴りやがった……

読者の皆さん・・・すみませんけど、俺の意識はブラックアウト  
しますね・・・

「神崎さん？あゝあダメだ！メロン？やり過ぎよ？折れちゃうよ  
お！そしたら、柳様に怒られるよ？」

「フンッ！私は当然の事をしたまでだ！」

「下着くらい、別にいいじゃないって、それどころじゃないわ！早く連れて行かなきゃ」

「そうだな？動かない方が都合がいい……このまま、あの方の所へ連れて行くわよ！」

痛い……

リトルジョン大佐（休憩中）無事か？

俺は気がつくと見覚えがある部屋にいた

「アレ！？何で閻魔の間にいるんだ？」

「おお！気がついたのかい？神崎零？」

呼ばれてびっくりして後ろを見ると、化け物みたいにデカイ白髪の老人が座っていた

「ワァァ！だ、誰ですかアナタは！？」

「これは失礼した！先にサイズを小さくしようかの・・・」

そう言うとき老人は人間サイズになった

まあ、それでも190cmくらいはあるのだけど・・・

「ワシは陽炎かげろう悪いが、試させて貰うぞ？」

そう言うとき、老人は体から灼熱の様なオーラを体から放つ

「うわぁ！あ、熱い！一体、何なんだ？」

「お主の体の中の強い力を開放しないとワシには勝てんぞ？」

何を言ってるんだこの老人は？体の中の力って何なんだよ！？

この状態では戦うしかないようだ・・・

俺は陽炎という老人へと突っ込んで行った

「ホホ！若いのおゝ？だが、相手へと踏み出す一步．．．とても大事な事じゃ！」

「クソ！俺は死ぬ訳にはいかないんだよ！」

いや、零よ？ここに来たって事は死んでいるって事だぜ？

作者ああああ！今までどこに行ってたああああ！つてか、何だこの展開！

陽炎さんに会いに来ていたんだよ？それよりマジにならないと死ぬぞ？魂ごとね？

うるさい！老人には悪いが、食らえ！主人公怒りの鉄拳！

「ダメじゃのう．．．そんなのでは．．．」

陽炎という老人に拳が触れた瞬間、まるで蜃気楼の様に消えてしま  
う．．．

「ホホ！神崎零よ？ワシは後ろじゃよ？」

「なっ！ば、化け物だこのじいさん！」

零よ？悪いけど、俺は先に地上に帰るから！頑張れ！

ちょ！作者！何とかしてくれよ！

「ホホ！神崎零よ？諦めたらそこで試合は終了だぞ？」

ヤベエよ！この白髪鬼！桜 花道もびつくりのヤバさだよ！

諦めたら駄目だよ？神崎零……

だ、誰だ！？俺の心に話しかけて来るのは！

それはどうでも良い事です……人生は泡の様に儚いモノ……  
あなたの力を開放しなさい……

アレ！？何だ？この感じは？何か優しい温もりに包まれて行く……

「ホホ！遂に覚醒したか？ならばこれでどうじゃ？幻龍炎一式・双げんりゅうえん龍炎開放じゃ！」

陽炎という老人は両腕に真紅の炎をまとい、腕を交差する

すると、両腕より双頭の燃え盛る龍が発現して俺に襲い来る

構えなさい神崎零！そして裁け！閻魔の如く……

「ウオオオオオオオ！閻魔殺人拳秘奥義・閻水鏡！（えんすいきよ  
う）」

俺が両腕を回すとまるで水で出来た様な鏡が現れる

何故、俺が柳姉ちゃんと同じ閻魔殺人拳が使えるのか分からない……

でも、今は生き返る方が先だ！

ドゴオオオオン！

「ホホ！閻水鏡か！ならば、無事じゃな？」

双頭の炎龍は閻水鏡の中に吸い込まれたらしい・・・

そついう技だと、何故か理解できる

そのまま技を返してあげなさい・・・

「了解！食らえ！閻水鏡よ相手を裁け！」

閻水鏡より双頭の炎龍が現れ、陽炎へと向かって放たれる

「ホホ！やるのお！ならば、幻龍炎二式・龍炎の舞い！」

向かい来る炎龍が陽炎に触れた瞬間、陽炎は姿が消えてしまう・・・

神崎零！後ろです！

「さっきの技か！」

「そつじゃよ？だが、今度はちと痛いぞ？」

振り向くと体中に炎をまとう陽炎がいた

「ホホ！食らいなさい！幻龍炎三式・豪龍炎！（ごうりゅうえん）」

体にまっていた炎が一つの大きな炎龍へと変わる……

「私たちも行きますよ！構えなさい神崎零！今のアナタならあの技までなら出来ます！」

「誰だか知らないけど、使わして貰うぜ！閻魔殺人拳秘奥義・ジャツジメントバブル！」

空中に無数の光る泡が現れ、陽炎へと向かう

向かい来る炎龍と無数の光る泡は強い力で激突した……

そして、まるで生物の様に暴れ狂う炎龍を泡たちは包み混む

「バブルが弾けた時……お前は裁かれる……」

気付けば、自然と言葉が口から出ていた

その言葉通り、泡たちが光を放ち弾けていくと炎龍は光と共に消滅した……

「ホホ！覚醒完了じゃな！おめでとう！神崎零よ！自己紹介させて貰おうかの？ワシの名は閻魔 陽炎．．．柳の祖父じゃ！」

えっ！？マジで？

「そしてお前が聞いた声は初代閻魔にして歴代最強の閻魔．．．閻魔 零光<sup>れいこう</sup>．．．ワシの祖父なのじゃ．．．」

何かもう意味分らないよ．．．

とりあえず、陽炎さんに説明して貰った

初代閻魔の零光はどんな時も平等に生物を裁き、誰からも信頼される人物だった

だがある日、自らの力により妻を亡くし、その罪を自らので裁き、

輪廻転生を行なおうとした・・・

だが、力が強すぎて後世に影響を与えてしまったために魂ごと封印をしていたのだ

だが、17年前に柳姉ちゃんが鈴吉さんとふざけて遊んでいる時に、  
うっかりと封印していた魂を開放してしまい一部が柳姉ちゃんに、  
残りが俺に転生したらしい・・・

「ん？って事は・・・俺は間違いで生まれたって事！？」

「まあ、そういう見解も出来るのう！」

何かショックだ・・・

「ホホ！そろそろ地上へ帰りなさい！その力があれば、あの世とこの世は行き来ができるからのう！」

うわー！なんだか便利な能力ですね・・・

まあ、いいや！帰ろう地上へ・・・

「ヤバい．．．道に迷った．．．」

そういえば、俺は方向音痴だったんだ．．．

「あつ！いた！神崎さくん こっちですよ？」

「い、イチゴ！助かった！地上まで道案内してくれよ！」

「探しましたよ！メロンがさっきの事を謝りたいって言って、迷子になった神崎さんをさがしてたんです」

えっ！？メロンが？俺を心配？

何かうれしいな！

「神崎さくん それじゃ行きましょ．．．」

話している最中にイチゴがコケかける

「イチゴ危ない！」

「キャッ！」

コケそうになったイチゴを掴んだのは良かったのだが……

「ア、アンツ！神崎さ〜ん！そこは胸で……アンツ」

ヤベエ！胸を揉んじゃった！推定Cカップだなこりゃ……

リトルジョン大佐も敬礼を開始したよ！

「神崎？貴様、イチゴに何をしている？」

「うわぁ！メ、メロン！？違うんだ！これは事故で……」

「なら何故、前屈みになる必要がある？」

「こ、これは生理的なものだよ！コイツはある意味、別の意識を持った生命体……」

言い訳の最中だがメロンは聞いていない！

作者ああああ！地上に帰っちゃったんじゃないのかああああ！

気にしないよ！主人公はドンツと構えてないと！

待て！今はそれどころじゃ・・・

「男の言い訳は見苦しい・・・死ね！」

カッキン！！（比喩的表現です）

「ウギヤアアアアアア！リトル・・・ジョン大・・・佐は止めて・・・」

うわっ・・・エグイ角度で入ったよ・・・

「もう！メロン！やり過ぎよ！本当に事故だったんだから！」

「イチゴ？私が来るのが遅かったら、ヤラれてたわよ？」

「それはそれで私は嬉しいけどなあ」

「はあ・・・とりあえず、神崎を地上に連れて行くか・・・」

「そうね？地上では柳様と蓮ちゃんが待っているもんねえ」

「蓮か．．．彼女は覚えているのか？あの事を．．．」

「いえ．．．覚えてないわ．．．でも、今はそれどころじゃないわ！早く地上に向かいましょう！」

そう言ってイチゴは一人で先に行く

「い、イチゴ！神崎と私を置いてくな！」

「気絶させたのはメロンでしょ？一人でおぶって来なさいよ」

そう言って先に行ってしまった．．．

「はあ．．．イチゴにはかなわないわ．．．」

黙って零を背負うメロンはボソツと呟いた．．．

「胸なら私のを触りやいいのによ．．．」

意外にモテモテの神崎零くんであった．．．



そのろく リトルジョン大佐の悲劇！イチゴの誘惑とメロンのヤキモチ！？（後

今回は零の誕生秘話と新キャラ登場、イチゴとメロンのコンビでしたがいかがでした？

この先、蓮の隠された秘密などいろいろありますが、それはまたの機会に投稿させて貰います

そのなな ジョジョ病の脅威と暴走！？（前書き）

どうもDearです

アクセス数がトンデモないことになってます（笑）

頑張って書いていきたいところですが、私が頭を怪我した為にしばらく更新が出来ないかもしれません・・・

ご了承下さい

そのなな ジョジョ病の脅威と暴走！？

死後の世界

誰一人として、その世界を正確に解明した者はいない・・・

天国と地獄

天界と魔界

今回は零が、その違いが分かる漢になるお話し・・・

突然ですが、僕は現生徒会長の脇谷 国男わきやくにおです

今日は日課のストリートライブをしています

ですが、平日の夜なのでお客さんは誰一人集まりません・・・

「やっぱり、夜の公園デビューは無謀でしたか．．．」

不良もいない公園で、とりあえず客寄せの為に有名な曲を歌う事にしました！

「1、2、アツ！ワントウ！スリイ！ハイ！僕は君いいのシデ  
レラボ！イ！恋する国の、う王子様すわあああああ！僕は君いい  
い．．．」

ウイイイイン！

歌っている途中で公園の中心から何か奇妙な音がした

歌を切り上げ、そっちを見ると、空間に大きな穴が．．．

恐る恐る近付いて見ましょう．．．

「な、何なんですかこれは！？警察に連絡を．．．」

僕が携帯を手に取ったその時、中より二つの光りが飛び出した

その一つがジャングルジムの天辺に不時着した．．．

光りの中から現れたのは小悪魔的な可愛さを持つ少女！？

「あゝ疲れた！地上へ着いたわ．．．」

「き、客が来たああああ！あつ！1、2、ワントウゝスリイ！ハイ！僕は君いいいのシ デレラボゝイ！恋する国の、う王子様すわあ！僕は君いいい．．．」

歌を開始し始めたその時、絶叫に近い歌声のタイミングで強風が吹く．．．

ジャングルジムの天辺に不時着した少女のスカートが見事にヒラリヒラリとなっているのですううううう！！

中からは美しい黒いアゲハ蝶が．．．

「そこの男よ．．．貴様！！見ているなあああ！」

その瞬間、僕の心の時が止った．．．

あまりの恐怖に体はギターを捨てて逃げたしていた

公園を急いで出た僕はガツチリとした男性にぶつかった．．．

「ウギヤ！す、すみません！ごめんなさい！ああ！それより僕を．．．」

男は僕の言葉を遮りこう言った……

「お前は『助けて下さい』と言う！」

「助けて下さい！はっ！何故、それを……この際、どうでもいい！僕は何もしないのに死にたくはない！助けて下さい！」

汗だくの僕に対して、男は指で僕の頬より垂れた汗を一粒だけ奪い、それをゆつくりと口の中へと入れた！？

「嘘の味がする……悪いが助けられないな……」

そ、そげなあああ！

「そうよ？私のスカートの中を覗いたでしょ？」

さ、さっきの少女！？いつの間に後ろに来たのですかあ！？

「妹の敵は許さない……妹の敵は俺が裁く！」

この男はいつの間に帽子を被ったんだ!?

しかも、髪と帽子が一体化してる!?

って!それどころじゃな・・・

「オラッ!」

「はにやあああああああああ!」

派・・・手に・・・ぶっ飛ん・・・だところ・・・ろでさよ・・・うなら・・・

「リサ?大丈夫か?」

「ええ、私は大丈夫よ?お兄様・・・」

「そうか?なら会いに行こう・・・柳の元へ・・・」

神崎家

天国から帰ると俺はベットのの上にいた

横を見ると、イチゴがスヤスヤと寝ている

そしてメロンがタイミング良く入って来た

「起きたか？先ほどはすまない・・・少しやり過ぎたみたいだ・・・」

「いや、俺も悪かったよ！どうにか無事みたいだから大丈夫！」

無理して言ってみた

実はまだ、リトルジョン大佐は激しく痛む

「そうか？なら、確かめさせてもらおうよ？」

そう言うと、目の前でメロンが恥じらいも無く服を脱ぎ始めた！？

「ちょ！メロン！？何で脱いでるの！？」

「柳様の夫になると言う事は、再び私たちの主人になるという事だ．．．使えなくなっていたら困る．．．」

メロンって着痩せするタイプなんだ？ってそれ所じゃねえ！柳姉ちやんにこんなところを見られたら殺される！だから落ち着けリトルジヨン大佐ああああ！

メロンは俺の心の叫びを無視して、トンデモない姿に．．．．  
思わず枕でリトルジヨン大佐（SEED覚醒）を隠す．．．

「使えそうだな？なら問題ない．．．」

今度は一瞬で服を着るメロン．．．助かったはずなのに、何か残念だああああ！

そして、そのタイミングでイチゴも起きる

「ふにゃ．．．神崎さん？目覚めたんですかあ？」

ええ、目覚めましたよ？俺もリトルジヨン大佐も．．．

「イチゴ？神崎のアレは大丈夫だ！私の裸に反応したからな？」

「メロン！ひどい！それは私の仕事なのに」

何だ？仕事って？マジでコイツらは天使の顔を持った悪魔だ・・・

「メロンさん？質問よろしいですか？」

「急に他人行儀だな？神崎よ？どうした？」

「微妙に引つ掛かったんだけど『再び私たちの主人に』って、何の事？」

思わずシーンとなるイチゴとメロン

あれ？俺、何かヤバい事でも言っただか？

「神崎さん？どうしても知りたいですか？」

「そりゃ知りたいに決まって・・・」

「神崎！本当に知りたいんだな？命をかけてでも、知りたいんだなあ！」

いや、真面目に命は勘弁して下さい

「神崎さん．．．実は私たちは蓮ちゃんと姉妹なの．．．」

「私やイチゴ、そして蓮は元々『ケルベロス』だった．．．」

うわぁ．．．意外な展開だな．．．

「地獄の門番として存在した私たちは、初代閻魔の零光様に気に入られて魔界より零光様に贈られたのよ」

「だが、零光様が自らを封印する際に私たちは特殊な力を授かり、体を三つに分けられたのだ！」

「三つのうち、二つはそのまま新種のケルベロスとして成長したの．．．それが、私とメロンよ」

「だが、残りの一つは零光様を想い、零光様と共に封印の道を歩んだのだ．．．」

「零光って、俺の前世の姿だよな？それに仕えていた残りのケルベロスは．．．」

「蓮ちゃんだよ．．．」

そうなのか．．．

幼い頃から蓮とは一緒だったから（飼い犬と主人として）変な運命

を感じる．．．

「蓮ちゃんは一部の記憶を無くしているわ．．．代わりに神崎さんの記憶を作り出してきたのよ」

「何か複雑だな？」

「そうなんです！蓮が神崎さんの妹なら私たちのお兄様でもある事になるんです」

「と言う事で、明日から私も義妹と言う事でよろしく！神崎．．．  
．じゃない！お、お、おに、兄ちゃ．．．」

急に顔から白い煙を蒸しながら見つめるメロン．．．

そのまま、恥ずかしさのあまり気絶してしまった．．．

裸を見せるより『お兄ちゃん』と言う方が恥ずかしいというのはおかしくないか？

「ちなみに義妹兼愛人的ポジションなら柳様公認なのでよろしくお  
願いしますね」

何を許可してんだ柳姉ちゃああん！？

俺はとりあえず、落ち着いたところでリビングへと降りる

すると、柳姉ちゃんの声と聞き覚えのあるセクシーボイス、更に興奮する作者の声が聞こえて来た……

「作者さ〜ん！お・ね・が・い？私のサービスシーンを〜もつと増やして〜」

「お母さんだけずるい！私もお願い」

「うひょひょ！ま、任せて下さい！」

作者ああああ！何してるんだああああ！

そして、香織さんと柳姉ちゃん！何でセクシーなチャイナドレスを着てるんだ！？

「あつ！零が起きて来たああ」

「あら？さつそくサービス開始かしら？」

「お二人さんの、好きにしているッス！では私はこの辺で・・・」

「

逃げようとする作者に向けて俺はとりあえずドロップキックを発動  
！！

見事に決まったドロップキックによりまるで爆発に巻き込まれた老人のように吹き飛ぶ作者

あつ！作者は起き上がった！そして、仲間になりたそうな目をして  
いる！

痛っ！何しやがる！

作者ああああ！貴様、小説の世界だからって気安く「」を使って  
出て来るんじゃないねえ！

いや〜！今日は二人に呼ばれたんだよ？『サービスシーンがもつ  
と欲しいのですが？』って事らしいよ！

簡単に買収されてんじゃねえよ！

二人の色気に勝てる男は、いや！漢は誰一人おらんわい！

怪我してる割には元気だな？心配する必要はないんか？頭を強く打ったはずなのによ？

正直、かなりキツい！しばらく、安静にしないと駄目らしい・・・  
まあ、死んだらこの小説の続きが書けないからな・・・

早く治せよ？今日はもう帰りなさい！

ういゝ！お疲れ！

「んで、二人共に何をしてるんですか？」

作者と心で会話中に柳姉ちゃんと香織さんはいつの間にか、俺をソファーまで連れて来て、両側にベッタリと絡みついている

「だってゝ出番が欲しいんだもん！」

「お母さん？零は私の大事な人だから、つまみ食いまでよ」

待てええええええ！勝手に俺の体売り買いするなあああ！

とりあえず、ここから逃げなければ・・・

「私たちから逃げちゃ駄・目・よ？」

な、何！？柳姉ちゃんが右腕を、香織さんは左腕を胸でロックして  
いるうううううう！

これではリトルジョン大佐の初陣が始まってしまふ・・・

ヤバい！誰か俺を助け・・・

ティンポーン！

「あつ！だ、誰か来たみたいです！玄関のチャイムが鳴ったので俺  
が行って来ます！」

「あら？別にイッてから行っても・・・」

ドッ、ドッヒヤア！香織さん！？何を握ってるんですか！？

「お母さん ナニを握ってるのよ?」

こ、コラ!カタカナにしちゃ駄目でしょ!

ティンポーン!ティンポーン!ティンポーン!

「ふが!か、かくなる上は．．．すまんリトルジョン大佐あああ  
ああ!」

ビヨーン(比喩的表現)

い、痛いが我慢だ!玄関に行かなくては．．．

「お母さん 手を放さないと零のが、大変な事になっちゃうよ?」

「あらゝそうかしら?今、放した方がゝ危険だと思．．．」

言っている最中に香織さんの手のロックが緩んだ．．．

ヒュューン．．．グバシッ!!(比喩的表現)

伸ばしたゴムが手元に戻る様にリトルジョン大佐は激しく帰還

そして、俺はその勢いで玄関まで吹っ飛ぶ

「ギャツピイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

ヒュン、ドン！

見事に玄関に激突完了

「し、死んじや駄目だ死んじや駄目だ死んじや駄目だ死んじや駄目だ死んじや駄目だ死んじや駄目だ！」

復活したところで玄関を開ける・・・

すると、小悪魔的に綺麗な少女と後ろに『ゴゴゴゴッ』というオーラの見えるゴツい男が立っていた……

「失礼ですが、こちらに閻魔 柳さんはいらっしゃいますか？」

「いますけど……あなたは誰？」

「名乗らせて貰おう！我が名はJ・P・ポルナ……」

名前を言う前に少女が男に肘鉄を食らわした!?

「失礼!私は魔界より来ました『城星』サリサル『里咲』と言うものです!こちらは私のお兄様の『城星』チョマニア『幸助』です!」

「魔界からですか?それはまた遠くから・・・って、魔界から来たんですか!？」

「ええ!それが何か問題でも？」

「魔界って事は、悪魔系の方ですか？」

「貴方は何も知らないのですか?魔界は地獄を管理する者がいる場所です!天国を管理するのが天界と同じですよ?」

「へっ?そうなんですか?知らなかった!とりあえず、中へどうぞ!」

里咲という少女を家に入れようとしたその時・・・

「き、貴様ああああ!リサリサに触れるんじゃない!」

「お兄様のジ ジョ病が始まったわ・・・悪いけど、相手を頼むわ神崎零さん?」

ジ ジョ病！？そういえばいつの間にか帽子を被って、髪と帽子が一体化してる！？

「テメーは俺を怒らせた・・・」

「ちょ！タイム！タイム！」

「何！？まさか、ザ・ワードか？貴様はD O派なのかああ！  
」

「落ち着いて！幸助さん！とりあえず落ち着いて下さい！」

「えっ？ポツポツポハトポツポ？」

「何でやねん！言ってねえよ！ちなみにレッドホッ チリペツパー  
とも言ってねえよ！」

「貴様やるな！」

「幸助さん？このネタ読者が分からなかったらどうするんだ！？」

「えっ？ポツポツポハトポツポ？」

何かムカツクなこのジ ジョ病患者！

ロードローラーで潰してやりたい気分

「私の妹に触れた男、怒らせた男．．．全て俺が裁く！次話で！」

「ちょっと待て！勝手に次話まで決め．．．」

「ダッテ、ジ ジョガ、スキダカラ！」

「コラ！なんで韓国人になるねん！」

「韓流ブームとジ ジョ融合大作戦だから！」

もうこの人に何を言っても『無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ無駄ッ！』って感じになりそうなので諦めよう．．．

こうして漢達は戦い、天に地に散って行くのであった．．．

作者ああああ！それは北の拳だああああ！何でジ ジョから北の拳やねん！？

ダッテ、ホクトノケンモ、スキダカラ！

うわ．．．うざい．．．

次回セクシーバイオレンス！愛と怒りと悲しみのシャ ニングフ

ンガーソードをお楽しみに

作者あああああ！それはGガ　ダムだあああああ！

そのなな ジョジョ病の脅威と暴走！？（後書き）

いかがでしたか？

恐怖のジョジョ病編になりました（？）けど次話は零vs幸助のちよつとパロディーバトルを考えています

できれば、激セクシーなシーンも入れたいので楽しみに（o^\_^）  
b

そのはち ジョジョ病ですが何か問題でも！？（前書き）

今回は前半にジョジョを濃いめにパロットたので分かりにくい場合がございます

ご了承下さいm（　　）m

そのはち ジョジョ病ですが何か問題でも！？

## ジョジョ病

その病に感染した者は『オラオラ』を始めとして、『メメタア』や『バーン』など、自らの背景や発言にジョジョ的要素が現れる超驚異的な病である

現在、この病にかかった者へのワクチンは開発されていない．．．

ジョジョ病患者はやっぱり多いよね？

俺が知るか！分かってる事はただ一つ．．．目の前の魔界人と作者はジョジョ病患者だ．．．

「神崎零よ？何をボーとしてるのだね？」

かなりウザいなあゝこの魔界人．．．



幸助さんは一秒間に十回の呼吸をしながら超絶な速度で突っ込んで  
．．．

「食らえ！波紋ッゴホッガハ．．．疾うえええ．．．走！」

まあ、そんなに早く呼吸しながら喋ればそうなるだろうな．．．  
真剣な顔して、顔が真っ青だよ．．．

今がチャンスなのかな？とりあえず、俺の中に眠る閻魔暗殺拳を試  
してみよう！

「食らえ！閻魔暗殺拳秘奥義！裁きの糸！」

この技は捕獲及び拷問を備えた技

蜘蛛の糸の如く相手を捕獲し、糸に触れた相手に糸を通してエネル  
ギーを送る．．．

「な、なんだと！これは、法王の結界！？」

「似てますけど違いますよ？動けば幸助さんは良くて気絶、最悪の  
場合はバラバラになるので動かな．．．」

この時の俺はジョジョ病の恐ろしさを、まだ理解していなかった．．

そして、幸助さんは魔界人である

俺の不完全な力では押さえ込む事など出来なかったのだ．．．

「悪いが奥の手だ．．．時よ！止まれええええええええええ！」

「はい？いくら何でもそれは．．．」

魔界人の身体能力は人間の10倍以上である

俺の不完全な力では押さえ込む事など出来なかったのだ．．．

超絶な力と速度で技を破り、気付けば目の前にいた．．．

まるで、テレポートをしたかのようなスピードに、俺は時が止った様に感じた．．．

零よ！すぐに右へ避けなさい！

零光さんの声で反射的に避けた俺の横を淡い光が天へと突き抜けていく．．．

「危ねえ！助かったぜ零光さん！」

いえ．．．私が貴方との会話する方が危険です！強過ぎる私の魂が零の魂を吸収する可能性がありますからね？

「マジッスか！？それじゃ、ゆっくりと相手をしてられないな！」

気を溜めなさい！一気に裁きますよ？

「了解．．．」

「何を独り言してるのだね？そうか！恐怖で狂ったのか！絶望だねえええええ！」

零光さんがいなかったら本当に絶望していただろう

そして、幸助さんがジョジョ病患者が相手だからこそ一撃で倒せる！

何故なら、裁きの糸には相手に幻覚を見せる効果もある．．．

強過ぎる幻覚は相手の肉体にまでいたるダメージを与える

それに合わせて現実世界での攻撃を与える事によりダメージは跳ね上がるのだ！

「悪いけど、裁かして貰いますね？閻魔暗殺拳秘奥義！ジャツジメ  
ントバブル！」

幸助さんには、この技を放つ俺の姿が、幻覚により別人に見えていた

「そ、そんな馬鹿な！お前は！いや、あ、貴方は．．．シイイイ  
ザアアア！？」

説明しよう！『シイイイザアア』とはジョジョ第二部に出てく  
るシーザーの事である

ジョジョ史上で最も過酷な死に方、そして感動を与えた作者にと  
つての英雄だ！

彼の得意とした技はシャボン玉を利用した技である．．．

作者よ？長い説明ありがとな．．．

しかし、ジョジョ病患者は説明長いな．．．

あつ！ヤバイ！幸助さん忘れてた！

裁きの泡を受けた者は己の罪を流される効果を持つ．．．

幸助さんの罪

それは、ジヨジヨ病とはいえジヨジヨを悪用（？）した罪である

「き、効いたぜ．．．神崎零．．．お前の魂の一撃、しかと受け止めたぜ？」

「それは負けを認めるという事ですか？」

「ああ、俺はシーザーには勝てない．．．お前の作戦勝ちだ．．．」

よし！これで、大人しく部屋に入ってもらえ．．．

「なあ？神崎零？俺、運命とか信じちゃうタイプだから、零との出会いは運命なのだと思うよ！」

待てえええええ！何故、N N A風になってやがるんだ！？

「お前はすでに俺の親友だ！これからよろしくな？神崎零！いや、シーザー零よ！」

そんなあだ名付けるんじゃないやねえええええ！

いいなあ！そのあだ名いいなあ！

作者あああ！お前の陰謀かああああ！

ふん！理由はただ一つ……。テーマは俺を怒らせた！じゃなくて、成り行きだ馬鹿野郎！

成り行きであだ名を付けるんじゃないやねえええええ！

とりあえず、落着いた所で部屋に入る事にした・・・

「あつ！零！もう終わったの」

「ああ、終わつたよ柳姉ちゃん……うて、何て格好してやがるんだああああ！」

柳姉ちゃんは黒いボンテージの様な物で体を纏っていた

もちろん、胸の辺りは大きく開いている・・・

女王様というのがピッタリの表現と言えるだろう・・・

「えっ？新しい戦闘服だよ？里咲に頼んでおいたの」

「お似合いですよ？魔界独自の生地で作っておりますから、戦闘に至っては、少々の中では破壊不可能ですし・・・」

そんなに頑丈なのか！？このセクシーな衣装は！？マジで峰ふじこもビックリだよ！

「柳姉ちゃん？これは何の為に作ったの？」

「えっ？零との生徒会長決定トーナメント用だよ」

忘れてたああああ！

「宜しければ、零さんにもお作りしますよ？ケルベロスの件でサインもいりますし？」

「サイン？一体、何のサインですか？」

「所有権移行のサインだぜ！シーザー零よ！正式なオーナーにならないと問題が山積みなんだよ！」

「そのあだ名は止めてください．．．分かりました！サインをすればいいんだね？」

「あら？お兄様？お先に契約は済ませたのですか？」

「ああ、こっちは完了している！男では初めてだが、リサとの契約には問題はないだろうな．．．」

「えっ？俺、幸助さんと契約したの？」

「ああ、そうだ！魔界人には体の一部に契約の紋章があるのだよ？私は尻にあるのだが、先ほど一撃を入られた時に契約が完了したのだ！」

尻に紋章って、アンタはキン肉マンかい！

「あら？神崎くんはソツチの趣味だったの？」

「ちょ！ち、違いますよお！幸助さんも何とか言ってく．．．」

「あんなに激しくされたの初めてだったな．．．」

「ラァァァァ！誤解を上乘せしてどうするんだワレエエエエ！」

「宜しければ、戦闘服をHG仕様にしますが、どうしますか？」

「遠慮します．．．てか、契約の方はどうすればいいですか？」

「契約は貴方のお部屋をお借りしても宜しいですか？」

と言う事で俺の部屋

契約自体は紋章に俺のエネルギーを送れば完了らしい．．．

幸助さんには裁きの糸にて契約が完了したらしい．．．

「では、契約が二件ありますので同時に行いますね？」

「分かりまし．．．って！ちょ！な、な、何してるんすか！」

里咲さんはいきなり上着を脱ぎ始めました．．．

思わず後ろを向いてしまう辺りは、何となく情けないな．．．

「大丈夫ですよ？水着を着てますから？紋章は胸元にありますから、エネルギーを放射して下さいね？」

水着を着てても正面に見れないって！違うところにエネルギーが補充されそうだよ……

とりあえず、このまま俺は30分程、手の平を里咲さんの胸元に当てていた……

「終了です！お疲れ様でした！これで世間的には明日からケルベロス達は以前から義妹だった事になりました！主人への無闇な危害も減りますのでご安心下さいね？」

「分かりました！里咲さんありがとうございます！」

「いえ、仕事ですから……あの？一つ聞いてもいいですか？」

「ええ、いいですよ？何ですか？」

「零さんは女性経験ないんですか？」

「えっ？いや、ないですけど……」

「そうですか……ないんですか……」

何故、こんな質問はさっぱりだ

しかも里咲さんが何故か軽くガッツポーズをしてるのは何故でしょうか？

「契約は終了しましたけど．．．私ともう一つ契約しませんか？」

「えっ？な、何の契約をですか？」

「魔界でのパートナーとしてですよ？魔界は入国する際に、案内人を付けないといけないんです！柳さんは閻魔なので良いのですが、零さんは人間なのでパートナーがいるのですが．．．」

「うーん．．．分かりました！じゃあ、お願いします！」

「ありがとうございます！では、失礼しますね．．．」

チュツ

．．．？

アレ？何してんの？唇が頬に当たってるんですけど．．．

「ふう、仮契約完了ですわ！本契約は魔界にてお待ちしていますね？」

悪魔だ．．．

この娘、絶対に悪魔ですよお客さん！

こんな事をされたら、普通は魔界に行くしかなくなるでしょ？

「あの？本契約って何をするんですか？」

「えっ？．．．零さん、女の子の口から言わせるんですか？」

な、何事！？

そんなに過激な事させる気が！？

「魔界でお待ちしてますね？色々とお教えできますし．．．」

何を教える気！？里咲さん口元が緩んでいて笑顔が怖いよ！

里咲の趣味はDTの少年を弄る事なの言っ てなかったか？

言っ てねえ！作者ああああ！コレは何の陰謀だああああ！

さあ？何の陰謀かね？とりあえず、頬に付いた口紅をとった方が

いいんじゃない？

えっ？マジ？早くとらないと柳姉ちゃんにバレたら．．．

ギイイイ．．．

アレ？いつから俺の部屋の扉は、ホラーに出て来る洋館みたいな音が出る様になつたんだ．．．

あつ！柳が恐ろしい程の笑顔で立ってるわ．．．

「れい？何をしているのかな？」

「や、柳姉ちゃん！違うんだ！別に何にもしてないよ！」

「私のこの手が真っ赤に燃える．．．零を倒せと轟き叫ぶ．．．」

「ちょ！柳姉ちゃん落ち着いて！話を聞い．．．」

「食らえ！愛と怒りと悲しみの！シャ ニングフ ンガアアソオ  
オオオオド！」

「ちょ！待て！待ってくれ！待って下さい！柳姉ちゃん！落ち着いて！」



「いや．．．無い方が俺は、大部分が楽になるんですけどね？」

「まあ、そんなに落ち込むなよ？それが零ちゃんの運命だって！」

何か嫌な運命だな！ちきしょう！

「それじゃ、すぐに地上へ帰ろうか？」

「あつ！俺、一人で帰れる様になったのでいいですよ！」

「いや、ダメだよ！出番が無くなちゃうじゃん！」

「い、嫌ですよ！近付かないで下さい！」

必死に逃げる事、約25分後．．．

「捕まえた！零ちゃんよ？もう逃げられんぞ！」

しっかりと腕をまわしてホールド完了したらしい．．．

「や、止める！放してくれ！俺は無実だ！」

「そうだね？無実だね？だから地上へ帰ろうか？食らえ！必殺！フ  
アイ ルアトミツクバスタアアアアアアアアアアアアッ！」

「ザン エフかよ！ってそれどころじゃ・・・ウギヤアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアッ！」

地上へ戻った零はその足でスト2を買いに行ったという・・・

そのはち ジョジョ病ですが何か問題でも！？（後書き）

更新スピードが遅くてすいません！

出来るだけ早く更新していける様に頑張っていきますので応援よろしくお願いします

そのきゆう 我慢は体に悪いんだけど!?(前書き)

更新スピード遅くてすみません・・・

今回は途中、エロが軽く高めになります(?)

ちなみに誰かさんの実体験が元になってますのでちょっとリアルかもしれないです

そのきゆう　我慢は体に悪いんだけど!?

破壊と再生

それは万物に対して当てはまる理

生れた命は傷ついていく．．．

そして癒される

だが、最後は燃え上がり壊れる．．．

壊れた魂は『閻魔』により『平等』に裁かれ癒される．．．

《天界・神の家》

神様こと鈴吉は、呑気に雑誌のグラビアを眺めていると、パンチパーマの天使『若井　修』（わかいしゅう）が慌てて走って来た

「よ、四代目ええ！四代目えええ！！えらい事になりやしたあ！」

「ん？どうした？つてか何故に髪型をパンチパーマにしたの？」

「いや、その．．．つて！それどころじゃないです！魔界より入電です！あの『破壊王ヤンシート』モシハ』の魂が何者かに奪取されました！」

「なんだと！馬鹿な！魔界にて何十もの封印をしていたはずでは．．．」

「さらに、『魔王ターム』トーレグ』と『暗黒王ロヒサマ』ノーチヨ』まで奪取されたとの情報です！」

「何！？まずいぞ．．．悪魔闘神の三獣獅の魂が奪取されたなんて．．．」

「犯人は地上界へ逃亡したもようです！犯人の特徴は三人組の女！そして仮面の男だそうです．．．えっと、こちらが映像です！」

鈴吉の前に立体の犯人のホログラムが現れる

「こ、これはまさか！ありえない！奴は奴は裁かれたはずでは！？」

「よ、四代目！落ち着いて下さい！どうしたんですか！？」

「こ、この男は．．．閻魔．．．」

《地上界・神崎家》

「いや〜平和やね！柳姉ちゃんは部屋で寝てるし！香織さんはいない．．．イチゴとメロンと蓮もない！今日は自由だあああああああああああ！」

えっ？何故、そんなに喜んでいるかって？

．．．．

いや〜そのね？何と云うか．．．

そうだね、分かりやすく言えば．．．

リトルジョン大佐のテンションが限界に近いのです．．．

柳姉ちゃんに見つかったら間違いなく柳姉ちゃんは『暴走』するの  
でね．．．

童貞って辛いぜ（笑）

えっ？やっちまえ？

いや．．．．．なんというか．．．．．やっぱりね？好きだけするのはね？愛がないとね？

この場合、ただ度胸がないだけだろうね！

う、うるさい！あんまり出て来るなよ！

今回はあんまり出て来てないけど？まあ、一人で頑張りな！

「って事で、さっそくネタ搜しと．．．」

15分経過

「しまった．．．．．母さんが全部捨てたの忘れてた．．．」

その時だ．．．．

確実に久しぶりに天使と悪魔が頭の中に現れたんだ．．．．

《零の頭の中》

「零よ？自らの欲望を開放しろ！」

「零、ダメだ！悪魔の囁きに耳を傾けるな！」

「ふん！天使よ！今日は助っ人がいるんだ！貴様の声など書き消してくれるわ！先生！お願いします！」

悪魔の呼び掛けと共に赤い髪眼鏡をかけた教師っぽい女性が出現した……

「零くん！最優先事項よ！ハジけなさい！」

謎の女教師の発言と共に天使にダメージが現れる

「うわあああ！馬鹿な！何故だ！何故、俺は悪魔に勝てない！」

「ふん……憎しみが足りないからだよ……もっと俺を恨みな……by某有名忍者漫画より！」

つて事で、柳姉ちゃんの寝ている部屋へ忍び込む……

いや……ちょっとだけ触ってみようかなあとね？うん！少しだ

よ？マジで！うん、マジで！

って事で潜入したんですが・・・

柳姉ちゃん・・・何故にデカめのワイシャツしか着てないの？

しかも部屋の扉に『何されても起きません』って張り紙って何よ？

絶対罠だろ？

でもな・・・男は罠でも行かなくちゃいけない時があるんだああああああああ！（笑）

「って事で柳姉ちゃん、失礼します・・・」

震えながら指を胸へ・・・

プニッ

や、柔らかか！ってかまさかのノーブラ！？

ヤバイ！これは確かめないと・・・

って事で掌で触ろうとしたその時だった・・・

ドンッ

何故か後ろのクローゼットが荒々しく開く

「「ああ！零兄ちゃんのエッチ！」」

そこにはイチゴとメロンと蓮の姿

そして触ろうとしていた手を誰かが優しく掴んだ・・・

「ドッキリ大成功 そんなに触りたかったのかなぁ？」

えっ？ドッキリ！？って事は・・・

「零も男の子だからね？やっぱり我慢の限界がきたんだね」

やっぱりバレてる！

そして気付けばイチゴとメロンと蓮はそそくさと部屋を出て行ったみたいだし……

「や、柳姉ちゃん！これはね！その……違っんだ！」

「誤魔化してもダメ そんな悪い零は私が裁いてあげるね？」

いや、柳姉ちゃん？何後ろ向いてるの？って何でワイシャツのボタン外し始めてるの！ちょ！待ってこの展開！さすがにそういうシーンはまずいって……

「大丈夫よ？ここから先は読者の想像にお任せだから って事で今日はここまで」

「ちょ！柳姉ちゃん！柳姉ちゃ……ってダメだって！マジでヤバ……うわああああああああああああ……」

こうして人はしだいに大人になって行くらしいですよ？（笑）  
次回より『最凶閻魔編』が始まるのでよろしく願いますね？

そのきゅう 我慢は体に悪いんだけど!?(後書き)

いかがでしたか?

今回短めの分、次回からまた頑張りたいと思いますので、ご意見や感想がありましたら作者までお願いします!m┐┐m

そのじゅう サブキャラ純恋歌〜甘さ控え目!?(前書き)

更新遅くて本当にすみませんm( \_ \_ )m

最凶閻魔編の前に間奏を何話か入れます

今回はサブキャラの二人が久々に登場です!

そのじゅう サブキャラ純恋歌く甘さ控え目!?

サブキャラ

それは主に主役を引き立てるキャラ

しかし、時に奴等は主役を超える主役へと成り上がる……

今回はそんなサブキャラのお話……

閻魔家門番の双子である右京と左京は珍しくふてくされていた

実は魔界の使者『城星兄妹』により、イチゴ・メロン・蓮が地上界で以前より零の義妹であるように世界の調律を変更した

その際に彼女らと二人の学年を一つ下げたのだ……

と言う事で見知らぬ人の中に二人はいた

「ムウ……左京よ?何か変な気分だな?」

「ふう……仕方ないですよ右京?我ら門前はあくまでシモベな



いきなりの兄弟喧嘩に一年A組は啞然．．．

しかも何か次元が違うので止めるに止められない．．．

「クソ右京！大体、昔から文句ばかり何だよ！俺が卑弥呼ちゃんと付き合ってた時も邪魔ばっかしやがって！」

「『えっ！？卑弥呼ちゃん！？』」

「貴様！それは私の初恋．．．許さん！大体、昔に本当の『光源氏』のモデルになったくらいでいい気になるなあああああああああああ！！！」

「『ひ、光源氏iiiiiiiiiiii！？』」

仲のよい二人だが、昔から女性関係には中が極めて悪い二人

兄・右京は『男は硬派』を貫き、弟・左京は『暑苦しいのは嫌いだから軟派』な性格

そんな訳で一度火が付くと止まらない二人．．．って、アレ？なんで二人ともこっち見てるの？

「作者！後で！ぶっ飛ばす！！ってか、むしろ今ブッ殺す！！」  
まさかの逆ギレ！？

ちよ、待て！落ち着け！早まるな．．．ウギヤアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアア！

はひ．．．わたひが気絶ひへ１０分後．．．

アレ？二人とも正座して説教食らってる？  
しかも双子の女の子に？

「．．．分かった！双子は仲良くしなさい！ねえ？ミルク？」

「そう．．．だね？仲良く．．．一番だよ．．．ね？クルミちゃん？」

えーと？彼女らはこのクラスの委員長と副委員長の『森野クルミ』  
と『森野ミルク』という双子の姉妹だっけ？

「ムウ．．．すまぬクルミ殿．．．」

「ゴメンねミルクちゃん．．．」

うわ！ヤケに素直！

「分かったならいいわよ！でも罰としてこれにサインして？」

「後．．．判子も．．．」

うわ！真面目に書いてるよ．．．

判子もペンケースから出したよ．．．

まさか．．．おい！二人ともまさか！

「．．．惚れた．．．」

ボソツと言ったあああああああああああああああ！

どうやら右京はソフトクリームみたいな不思議な髪に天真爛漫なクルミちゃんに、左京は黒いショートヘアに大人しげなミルクちゃんに惚れたらしい……

二人とも高校生らしいスタイルの持ち主だがこのタイプは後に大化けるタイプだ……

「どうやら左京よ？我らは運命共同体みたいだな？」

「ああ右京！共に頑張ろう！……って、さっきの書類は何？」

慌てて二人は後から貰った注意事項の紙を見る……

そこにはこう書いてあった……

『的島高校バスケット部にようこそ！』

沈黙の二人

「バスケットって何じゃ？」

「わからん……」

だ、大丈夫か？こいつら二人は……

《放課後・体育館》

「たのもー！」

「昼間勧誘された門前兄弟です！」

素直に体育館に二人で来ました

「あつ！来た！お兄い……じゃない！キャプテン！新人部員だよ？」

「はあ！？この時期に新人部員か？」

「うん……うちの……クラスの……門前……兄弟？」

「まあ、いいや？二人ともよく来た！俺がキャプテンの『森野久真<sup>ひさま</sup>』だ！」

「えっ！？お兄さんなんですか？」

「フム……それは知らなかった……よろしくお願い致します……」

という感じで挨拶していると・・・

「馬鹿野郎オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオ！バスケ部足る者、挨拶は『チュースツ！』だあああ  
ああああああああああああああああ！！」

いきなりキレたあああああああ！

しかもクリンを殺された時の孫空みたいにスーパーサイ人になつたああああ！

「ちよつと！キャプテン！人前でスーパースケ人にならないでって言ったでしょ？」

スーパースケ人！？

「お兄ちゃん……通称『森の熊さん』って……呼ばれてるよ?」

迫力のない異名来たあああああああああああああああ！

「はっ！す、すまなかった！驚かしたな！」

「いえ、慣れてますから大丈夫です」

「な、何い！．．．なるほどな！クルミ！ミルク！よく連れて来た！こいつら良い根性してやがる！」

「えへへ！そうでしょ？二人とも身長も高いしね！」

「うん．．．１８３くらい．．．かな？」

なんだかいい感じで和んでいるなあ？

でもバスケのルール知らないんだよこの二人．．．

「えーと？森野キャプテン！悪いんだけど俺ら．．．」

「バスケとやらを知らぬのだ．．．やり方を説明してくれぬか？」

次の瞬間、キャプテンのが再びスーパーバスケ人になったの言うまでもないだろう．．．

結局、3時間25分ほど正座してバスケのルールを聞かされた二人は、今日は雑用として働く事になった

森野姉妹と一緒に．．．

「それじゃ買い出しに行こうか！それに新しいユニホームも取りに行かなきゃ！」

「そう．．．だね？二人は．．．荷物持ち．．．大丈夫？」

「クルミ殿！任せてくれ！我ら兄弟．．．」

「最強の荷物持ちだからね！んで、ミルクちゃん？何を心配してるわけ？」

沈黙の二人

ふう！と、溜め息をはくと姉クルミが一言言った．．．

「うちのお兄いは過保護でね．．．私たちに手を出した男子は血祭りに会うの！おかげで今だに彼氏も出来ないわよ！」

「うん．．．前に買い出しで．．．やっぱり．．．言えない．．．」

えっ！何が！？ねえ？何が言えないんですかああああああああ  
ああああああああ！！

「それなら心配いらないよ？なあ右京？」

「フム．．．我らは門前兄弟．．．」

「いかなる者でも守り抜き．．．」

「いかなる者も通さぬ．．．」

「一騎当千！二人で二千！我らに絶てぬ射抜けぬモノ無し！！」

なんか後光がさし始めたよ二人共．．．

「ってかよ右京？よく考えたらバスケットアレじゃねえ？昔、アリとやったやつ！」

「おお！アレかのお？一度だけやったような気がするわい！」

「えっ？アリ？」

「ああ！何だっけ？そうそう！猪と異種格闘技戦やったやつなんだけど！」

「そうじゃったの！でも前日に我らのぶれいくだんすう？の真似をして足を怪我したからのぉ？試合は引き分けになったのぉ？」

「も、もしかしてアリって．．．モ メドさん!？」

「ふふ．．．クルミちゃん．．．引っ掛かつてる．．．二人．．．共．．．冗談うまいね？」

はて？冗談かマジかは知りませんが、今回はここまで！

次回セクシーバイオレンス！『チューズ！的島高校バスケット部!？』をお楽しみに！

今回はセクシー路線で行きまっせ．．．

そのじゅう サブキャラ純恋歌く甘さ控え目！？（後書き）

純恋らしくエロさ控え目でしたがどうでしたか？

次回はセクシーが爆発します！

感想などがございましたら作者までお願い致します

そのじゅうち　　チューズ！的島高校バスケ部、仮面パンダーの悲劇！？

ヒーロー

それは希望の光

ヒーロー

それは夢き者・・・

# 《神崎家自宅》

俺が目を覚ますと、朝方まで隣りにいた柳姉ちゃんはいなくなっていた

うん、なんと言つか・・・何げに脱DTしちゃいまして・・・

ベットに少しだけ温もりが残っていたので、メシでも作りに一階に降りたのだと思い、俺は部屋を出た

一階に降りたが、そこには柳姉ちゃんの姿はなかった

代わりに置き手紙が一つだけ居間のテーブルに置いてあった

「急用であちらに一度帰ります 帰る前に連絡するね？ 柳より愛を込めて」

愛を込めて．．．．

いい響きだあ．．．．

俺は深い愛を噛み締めながらテレビをつけた

「ニュースです！最近まで起こっていた未確認生物による襲撃事件は謎のヒーロー『仮面パンダー』により沈静化しました！」

最近売れっ子の女子アナ『狭山 遙』（さやまはるか）が満面の笑みで原稿を読んでいる

仮面パンダーとは、近ごろ活躍中の謎のヒーローである！

何年か前まで凶悪犯罪の解決に一躍し、最近では未確認生物．．．．つまりは怪人的な奴等が表れた為にその退治に活躍している

仮面ラダーよりスパダーマンに近い雰囲気があり、近頃の週刊誌や深夜番組に引つ張りダコである

世間には秘密だが、俺は彼の正体を知っているんだよねえ．．．．

「クマの野郎．．．活躍しまくりだなあ？こつそり話でも聞きに行くか．．．」

俺はテレビを消して的島高校へと向かった．．．

# 《的島高校体育館》

俺は体育館へ入ると、見覚えのある二人が『クマ』にシゴかれているところだ．．．

「んあ！右京！左京！お前ら何でバスケしてるんだあ！？」

「ムウ！零殿！」

「ウイッス！零先輩！バスケ部に入っただよ？」

「お前らがバスケ部！？何を目論んでるんだよ．．．まあ、いいや！よう！クマ！久しぶり！」

「おう！何しに来たんだ？まさか、バスケ部に入りにか？」

「いや！残念ながら俺はバスケは止めたんだ！」

突然の来訪者にざわめき始める体育館

「あの人って『的島中の流星』だよな？」

「ああ！マジだ！キャプテンとコンビ組んでた零さんだよ！」

俺って実は中学時代はバスケット部にいたんだよな？

チビなのにうまかったから身長がデカイクマと一緒に全国大会とか出てたんだよなあ……

まあ、中一の時の全国大会の帰り道でクマは仮面パンダーになることになったんだけど……

「あつ！零兄いだ！何してるの！」

「久し……ぶりだね？零兄さん？」

「おお！クルミにミルク！見ない間にいい女になってるじゃ……

」

ガシッ！

ザッ！

会話の途中で右京と左京が俺を引っ張り、体育館の端っこに詰め寄る……

「彼女らとはどういうご関係で？」

「な、なんだ？どうしたんだよ？」

「答える？じゃないと地獄に送るぞ？」

「クマとは小学生からの仲だから、二人もそれくらいからかな？……んで？どっちがどちらを好きな訳？」

「……！！なっ！何を！違うぞ！別に違うぞおおおおおおおおおお！」

バレバレやねん

まあ、いいや！それを餌にいい事を思い付いたしなあ（笑）

ガラガラ

その時、体育館の扉を開けバスケ部コーチ『又亜先生』が来た

彼は学生時代に名門である私立寺音大付属高校でエースと呼ばれた

バスケットマンである・・・

そして大学進学後でもその力を発揮していた

現役時代は他の選手の三倍のスピードで動くと言われ、他校に恐れられた存在

彼は全日の選手を何度か経験し、念願であつた高校バスケのコーチへなつたのだが・・・

実は彼は仮面パンダーを作り出した張本人

本人は事故により選手生命を絶たれたがサイボーグとして復活したらしい

それ以来、裏で犯罪と戦っていたのだが、偶然にも巻き込まれたのが俺とクマだった・・・

奇跡的に怪我がなかった俺に対してクマは瀕死の重傷

命を繋ぎ止める為にクマはサイボーグになった・・・

「おや？神崎零ではないか？久しぶりだな？」

「ども！お邪魔しています！又亜先生はクマにご用事ですよね？」

「ああ、認めたくは無いものだな・・・少しトラブルが起きてしまつてね？」

怪人でも現れたのだろうなあ・・・

クマは顔をキリツとさせて又亜先生と外へ出て行った・・・

「おい？クルミ！ミルク！今日は終わりらしいから遊びに行かないかあ？今、的島プールランドの無料チケットがあるんだけど？」

「ええ！？行く！零兄いだったらどこでも行くよ！」

「うん・・・私も・・・行くよ？」

「「なっ！何！」」

おお！食いついた！

「零殿？我ら門前兄弟、森野姉妹の安全を守るとキャプテンに誓った！」

「そういう事で、零先輩でも抜け駆けは駄目だよ？」

「ん？じゃあバスケットで決着つけるか？お前らが俺から一点でも取っ

たら勝ち、俺は切り良く30点で勝ちつてのはどうだ?」

「よし!その賭け乗ったああああああああ!」

10分後

零・25点

門前兄弟・0点

「どうした?二人共?守りには自信があるんだろ?止めてみるよ?」

「ば、化け物か!ヤバいぜ右京!」

「うむ……強い……だが!負ける訳にはいかない!」

「零兄い頑張れ!門前兄弟も頑張れ!」

「頑張……って……みんなで……行こうよ?」

「「みんなで？みんなでプール!?」」

その時、あまりにスキが出来た二人を飛び越えて俺はダנקを決めた……

これで火が付いていないなら二人はプールには連れてってやらない  
と思いますながら

「左京……我ら二人、プーるに行くぞ?」

「ああ、右京!鬼フック!零先輩をぶっ倒す!」

彼らは必死に攻めた

だが、実力差は激しくボールは奪われた

「「空気読めやあああああああああああ!?!」」

空気くらい、読んでるんだよ……

俺が一番『得意』だった3Pシュートを放った

だが『惜しくも』それは外れた……

そして、その玉は門前兄弟の手に渡ったのだ・・・

《的島プールランド》

「零殿・・・あのしゅくと・・・」

「わざと外したでしょ？俺らの為に？」

「ん？違うよ？マジで『奇跡的』に外れただけだよ？いや〜！『ブランク』だね・・・って事にしといてくれよ？」

「それじゃ、納得しないツスよ！なあ！右京？」

「ウム・・・我ら二人はそういうのが一番嫌・・・」

「「お待たせ！」」

「おっ！二人とも来た来た！可愛い水着だな？」

姉のクルミは水色のビキニでシンプルな感じだ

妹のミルクは白いフリフリの可愛い水着である

スタイルは着痩せタイプらしい・・・

何よりクビレが国宝級のラインである

痩せ過ぎず、かと言って太くはない・・・

胸やヒップはなかなか良い形なのでお兄さん安心したよ！

「お前らこついうのも嫌いなのか？」

「大好きです！」

だろうな・・・

まあ、いいや！こいつらが楽しんでいてくれれば・・・

「右京君！ウォータースライダーに行こうよ！」

「ウム……クルミ殿に任せる！」

「左京・君？私たちは・・・恐怖のプールに・・・行か・ない？」

「もちろんいいよ！二人で行こうよ！」

そいつに！

お前ら二人つきりになつてだな……

[illegible]

なんで俺だけ一人なんだよおおおおおおおおおお  
おおおおおお！！

つてな事で、一人寂しく島プールランド名物の『星の白金』で焼きそばを自棄食いです……

店主は何故か、俺の自棄食いを大食いチャレンジだと思なして『オラッ！オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオーラアアッ！』と叫びながら焼きそばを作っています

既に20皿目です

マジでふざけるなよ店主の野郎……

「少年！いくぜオイ！ラスト21皿目の星の白金特製『ザ・ワールド21』時の覇者』だ！食いな！サービスだ！」

ありがたいけど、既にリバーズしそうです……

なんか俺の時は止まってる感じがします……

「すみませんが、相席よろしいかしら？」

スペシャルな焼きそばに手を付けたその時、黒いビキニを着た女性に話しかけられる

スタイルは上々で髪は金髪、そしてなにより水着の面積がおかしい……

そう……ビキニはビキニでも三角ビキニでTバックだったのだ……！！

文句無しにセクシーな女性であつた

だが、何となく嫌な予感がした……

俺はこの女性を知っている……いや、違う！恐らく零光さんが知っているんだ……

体から出ている魔力が今の俺でも感じ取れる……

彼女は俺に笑いかけてこう言つた……

「久しぶりだねえ零光？そして、初めまして神崎零君？」

次の瞬間、二人の間を裂く様にボロボロになった仮面パンダーが現れた……

「くっ……零……離れる……こいつは化け……物だ……」

「なっ！そんな馬鹿な！仮面パンダー！お前がやられたのか！？」

「ああ……今まで現れ……てい……た未確認生物は……この世の生物……ではない……こいつらが……生み出したんだ……」

「うふふふ……そうよ？私たち邪魔をしていたのがタダの人間だったなんて驚きよ？でも、良かったわ？貴方を見つけられて……」

」

「仮面パンダー．．．ここは俺に任せろ．．．」

「なっ！馬鹿な．．．お前じゃ．．．」

「お前が知らない間に俺にも色々あつてな？今の俺は半分くらい人間じゃないんだ．．．それに、ここには戦友の妹たちと来てるんだ．．．そっちを守ってくれ．．．」

クマは妹を守らないとならないと実感した

だがそれ以上に自分の力不足な事を悔やんだ

敵に対して、仮面パンダーとして、一人の漢として初めての敗北

クマは悔しそうにその場を立ち去った．．．

俺は．．．

俺は一人のヒーローを犠牲にしてしまったのかもしれない

でも今は悲観している場合ではない．．．

生きるか死ぬかの戦争が始まるのだから．．．

まさか全ての世界を巻き込むとはその時、思ってたのだけ  
れど．．．



そのじゅうち　　チューズ！的島高校バスケット部、仮面パンダーの悲劇！？（後書

いかがでしたか？

今回は軽くパロってみましたけど・・・

何だかんだで、文章が荒くなってしまい申し訳ありませんでした

セクシーが爆発の予定でしたが、小爆発だったので次回に持ち越しになります

ご意見・ご感想を頂けるとありがたいです

そのじゅうに 覚醒の音色！？（前書き）

今回は前半にヒロインの柳の目線

後半に主人公の零の目線で参ります

そのじゅうに 覚醒の音色！？

輪廻転生

この世の理

そして、彼らにとっては運命の歯車

そう・・・今、時は動き出した

《神崎家・零の部屋》

私の横にはスヤスヤと零が寝ている

寝顔を見ているとなんだか凄く幸せな気分になってきた

ピコピコ！エンマニデンワダヨ！

あつ！私の携帯がなってるわ！

誰からだろう？あれ？鈴吉さんからだ！

「柳！朝からすまん！今すぐに天界に来てくれ！緊急事態だ！」

「えっ！？今から？閻魔代行のおじいちゃんに連絡してよ！私、今疲れて・・・」

鈴吉さんは少し間を空けて言った

「第二次閻魔戦争が起るかもしれない・・・」

「えっ！？どういう事なの？そんな事ありえな・・・」

「説明は後だ！このままではお前と零ちゃんが危ないんだ！」

零が危ない・・・

その言葉を聞き、私は鈴吉さんに『わかったわ』とだけ言い、戦闘用の服に着替えた

零は私の大事な人だから私が守ってみせる

まだ寝ている零の頬にそっとキスをして私は部屋を出た・・・

《天界・神の家》

「鈴吉さ〜ん！柳が来てあげましたよ」

「うわ！は、早っ！すまん少し待ってくれ！魔界より里咲お嬢が来るからな．．．」

「里咲が来るの？一体何が起ったの？説明だけでも．．．」

ガチャ

鈴吉の部屋の扉が開き鈴吉専属の天使『若井修』が姿を現した

「四代目！里咲お嬢がいらっしやいました！」

「あっ！修ちゃん．．．何故にパンチパーマなの？」

「さすが柳．．．神様の俺ですら謎の事に早速ツツコんだな」

「え〜と．．．朝、起きたらパンチパーマに．．．ってそれはどうでもいいです！四代目！すぐにお嬢をお通しします！」

「鈴吉殿よ．．．．．すまない．．．．．悪魔闘神の三獣獅の魂は奪取されてしまった」

「それは知っている．．．．．それより、魔界より送られて来た映像が問題なんだ！」

若井修が急いでホログラムを部屋に映し出す

「本当に奴なら実界を含んだ全ての世界が危ないのだよ．．．．．」

「うそ．．．．．そんなはず．．．．．鈴吉さんこの人は．．．．．」

「犯人を知っているのですか！柳様！鈴吉殿！コイツは一体．．．．．」

柳は外を見ながら小さい声で言った

「第一次閻魔戦争の主格、元裏閻魔界の『閻魔零影』（えんまれい えい）よ．．．．．恐らく三人の女は裏閻魔部隊の神楽姉妹かぐらしまいの中の三人だわ．．．．．」

「閻魔零影に神楽姉妹！そんな．．．かつて天界と魔界にてテロ行為を働いた彼らなのですか！？」

「そうね．．．お互いにテロが起り疑心暗鬼になったかつての天界と魔界はお互いを傷つけあったわ」

「ああ．．．それを解決させたのが初代閻魔の零光様．．．そして、奥様の『神楽リア』だった．．．」

私はその時、絶望に包まれていた

閻魔零影は零光様の双子の弟であり、裏閻魔界の王であった

力は零光様に匹敵し、主に魂が浄化不可能に近い者たちの心を浄化し転生を行う役目を持っていた

そして、神楽姉妹は魂の浄化によって生まれる凄まじいエネルギーにより誕生した生命体である

長女の神楽リアは零光様の何者にも平等な姿に魅力を感じて結婚したの．．．

「よ、四代目えええ！魔力反応がありましたああああ！」

「良くやった！神楽姉妹のものか！？」

「ええ！ですが、魔力反応がもう一つ．．．相手は．．．神崎零だと思われます！」

「何！マズい！今の零ちゃんでは・・・」

「鈴吉さん！私……私、行かなきゃ！」

「ダメだ！お前にはする事がある！」

「でも……」

「四代目ええ！場所の特定が出来ました！現世の的島プールランドです！」

「メメタア！！！」

その時、里咲が凄まじい奇声を発して驚いた

「ど、どうしたお嬢！？お前が驚くとは珍しい」

「い、いえ……実は兄が今、そこに修行しに行つてまして……」

「こ、幸助が！？すぐに連絡しろ！二人なら……しかし、膨大なエネルギーを押さえられない……」

「よ、四代みえええええええええ！現場で門前兄弟が遊んでい  
ますううううう！」

「はあああああ！？あのバカ兄弟が？いや、待てよ……柳！」

アイツらって確か．．．」

「二人で協力した時の結界能力は半端じゃなく強いわ」

「よし！いけるかもしれない！おい！修！門前兄弟に連絡を！そして柳．．．お前は．．．」

「分かってるよ？私の中の魂を一つにするのよね？」

「ああ、零光様の『技の記憶』の部分を引き継いだ魂がお前の本来の魂を邪魔している．．．そして、本来の魂の特性でお前は零ちに魅力を感じていたんだ．．．」

「えっ．．．それってまさか．．．」

「ああ、柳．．．お前の前世は．．．」

《的島プールランド》

俺は神崎零

二つの心を持つ男

一つは俺でもう一つは初代閻魔の閻魔零光

そのお陰で柳姉ちゃんや他の仲間達に出会えた・・・

でも、今は死にかけているんだよね・・・  
そうだ・・・時間は10分くらい前に戻るけど・・・

「零光を知っている・・・アンタ何者だ？」

「私？クスクス・・・私は神楽メア・・・神楽姉妹の次女であり裏閻魔界三大女帝の一人よ？」

「裏閻魔界？そんなものがあるのか！？」

「今は無いわ！零光に消されてしまったからねえ・・・そして、これは復讐なんだよ神崎零・・・リア姉様を殺されたな！」

凄まじい魔力をメアは一瞬だけ放出し、俺は吹き飛ばされる

メアの怪しく紫に光る目は恍惚にひたっていた・・・

「弱い．．．これが神崎零か．．．零光よ？お前、出てこないでいいのかい？」

「クソ！やられっぱなしってのはムカツク．．．神楽メアよ！アナタを裁いてみせる！」

そう言つて10分くらい経つたんだ

俺は吹き飛ばされるばかりでメアにダメージを与えられてない状態だ．．．

本気でヤバいと思つていたその時だった．．．

「貧弱！貧弱ウ！シーザー零よ？何、やられているんだい？」

「うわっ！こ、幸助さん！？何故ここにいるんですか！？」

「良い質問だ．．．俺はな、地上に修行に来ていたんだ！すぐそこの『星の白金』にな！」

「ハイ？何故にあそこに修行へ？」

「答えはシンプルだ．．．お前に負けたからだよ！そして、シーザー零は俺が倒したい相手だ！だから、助太刀してやるよ！」

「幸助さん．．．ありがとう．．．」

「なんて事ないさ！（本当は里咲に頼まれたただけだな！）俺は親友を捨てたりはしない！（里咲のお気に入り潰すと後が怖いんだよ！）」

「クスクス．．．魔界の者か？副音声が聞こえているよ？」

「チツ．．．いいんだよ？シーザー零には聞こえてないから！」

「副音声って．．．何をしゃべってたんすか？」

「気にするな！それより．．．いくぜオイッ！」

「了解．．．」

「させないよ？というより、私にはお前らの攻撃は効かないのさ．．．」

そう言うともアは一瞬で消える．．．

消えたかと思えば現れて俺らはピンボールの様に遊ばれた

「シーザー零！裁きの糸を！あれなら相手を捕まえられるだろ！」

「いや、無理だよ！それならさつき試したんだ！」

「チツ．．．ならこれでどうだああああ！時よ！止まれ！」

次の瞬間、幸助さんは時間軸を何十倍にも上げた

ズガガガガッ！

その結果、まるで時が止まったかのようになり、メアに幸助さんの高速の打撃がうまく決まる

「シーザー零！今だ！裁きの糸を！」

「うおおおおおおおおお！閻魔暗殺拳秘奥義・裁きの糸！食らいやがれ！」

シュビンッ！

メアは確かに拘束されたはずだった．．．．  
だが、捕まえたソレはすぐに形を崩し、消えてしまった．．．．

「なっ！残像だと！確かに俺の打撃も決まったはず．．．．」

「残念だねえ．．．カスつてもないよ？魔界人！！」

「幸助さん！後ろだああああ！」

バーン！

幸助さんは吹き飛ばされた．．．

ヤバイ．．．

メアがどうやって攻撃しているのかも分からない．．．

やはり零光との会話をするしかないのか？

でも．．．前に零光が言っていた

これ以上、会話をすれば俺は消える可能性が高いと．．．

「残念だねえ．．．二人そろって食べてあげるわ！」

「残念だなメア！そうはいかない！」

も、門前兄弟！？バカ！お前らは森野姉妹を守っていないと．．．

「零殿！彼女らの心配は無用だ！」

「もう、安全なところに逃がしたからな！それより、零先輩！相手はメアの姉御かよ……」

「おや……門前兄弟じゃないか？色ボケ兄弟が何の様だい？」

「我らは門前兄弟……」

「いかなる者も守り抜き……」

「いかなる者も通さぬ……」

「一騎当千！二人で二千！我らに絶て射抜けるモノ無し！」

そう言った門前兄弟は両腕を地面に突き刺して叫んだ！

「門前流大結界・天地無双！発動！」

「何！？……私の技が封じられてしまう……」

「零殿！メアの姉御は幻術を使っているのだ！」

「俺らの結界でテリトリーを作った！しばらくは技が使えないはずだ！」

「なるほど……幻術だったのか！って！メアがいない！」

「私ならここよ？楽しい道化だったわ！クスクス……」

メアはカクテルを飲みながらこっちを見ていた……

少し赤くほてった体は益々セクシーである

「しかたがないねえ、遊んであげる……」

「零殿！こちらに！幸助殿！しばらく時間を稼いでくれぬか？」

「ブラボー！オオ……ブラボー！任せてくれ！」

「零先輩！柳様から伝言だ！零光様と会話を始めてくれ！」

「柳姉ちゃんが！？……分かった！しばらく頼む！」

「承知！門前流大結界・龍虎乱舞！発動！神崎零を包囲しろ！」

俺は門前兄弟の結界に包まれた……

零光との会話は膨大なエネルギーが必要になるからだ

俺は会話を開始しようとしたその時、結界の中に一つの光が飛び込んで来た……

真っ白の世界

なんだここは？

何も無い

そうか．．．これは俺の精神世界なんだ．．．

そうです！神崎零よ？ここはアナタと私の心の狭間です

れ、零光さん？どこにいるんですか？

私は君．．．すでに消えつつあります．．．

えっ！？そんな！俺が消えるはずじゃ？

完全なる転生が始まったのです！さっきの光．．．あれは柳に混ざってしまった私の魂の部分です！零は私の『記憶の魂』を受け継ぐ者．．．それに柳が受け継いでいた私の『技の魂』が重なり

新たな転生が始まりました

新たな転生？それって一体……

私が完全に神崎零に転生するのです。そして、私は消える……

そんな！俺……そんな事、望んでな……

いいんです。私は神崎零……今は神崎零でなくてはならないのですから……最後です零……私たちは顔を見た事がなかったですね？握手しませんか？

零光さん……わかりました……最後に握手しましょう！

「初めまして神崎零」

「初めまして閻魔零光」

零光さんは光の中から姿を現した

そこにいたのは不思議だが、俺だった……

「私はアナタですから．．．姿はほとんど一緒ですよ。さあ、手を出して．．．」

「零光さん．．．ありがとうございました！さようなら．．．」

「ええ．．．柳を．．．アナタと私が愛した彼女を守ってあげなさい」

「えっ！？それって一体．．．」

「さようなら．．．神崎零．．．転生開始です！」

「おい！門前兄弟！まだ終わらないのか？不死身の幸助さんも限界が近いんですけど？」

「幸助殿！もう少しで終わる！耐えてください！」

「悪いね幸助ちゃん？今度、ジ ジョ立ちを手伝うから頼むよ？」

「了解！任されよ！オラツ！無駄ツ！ドラツ！！」

「さすがに魔界人だねえ？良い動きだよ？そろそろ決めてあげようかなあ？」

「う、右京！零先輩のエネルギーが予定地点を突破した！」

「では．．．零様は転生に成功したのだな！よし！結界解除！」

プシュウ．．．

「待たせたな？神楽メア．．．俺が相手になるぜ？」

「そ、その風格！チィ．．．零光！貴様かああああ！」

「いや、俺は神崎零．．．零光の意志を継ぐ者！」

「ふん．．．舐めるんじゃないよ！食べてあげるわ！」

メアは物凄いスピードで俺に近付く

つてか水着がずれないのが不思議でしかたがないが、あえてそこはツッコまない

「閻魔暗殺拳秘奥義．．．快楽絶頂流舞拳！！」

シュババババツ！

「クウ．．．し、しまったああん！く、あん！不埒なまねええんを．．．」

「まだまだ！閻魔暗殺拳秘奥義・クロスエロスエクスタシー！」

ジャキーンッ！

閻魔暗殺拳秘奥義・クロスエロスエクスタシーとは？

凄まじい音と共に放たれた強大なエネルギーが敵の内部よりエネルギーを吸収する技

生命体はエネルギーを吸われる際にとんでもない快楽を得る

さらに閻魔暗殺拳秘奥義・快楽絶頂流舞拳を放たれた後に使用する事により効果は何倍にも跳ね上がる

閻魔暗殺拳秘奥義・快楽絶頂流舞拳を忘れた方は『ドキドキ！新生徒会長決定トーナメント・後編』を見よう！

「ああああん！い、今の私では．．．うん．．．覚えて．．．あん！いろ．．．」

「ふう．．．シーザー零よ？やったな！」

「零殿．．．ついに完全に転生したのだな．．．」

「ああ、そうだ．．．零光さんは俺と完全に一つになった．．．」

「

「零先輩．．．久しぶりに零光様の技を見れたよ！やっぱスゲー！」

零光さん．．．

ありがとう

俺、何とか生きてます

でも、何か不安が消えないんだ．．．

何故なんだ？いや、俺は知っている

敵はまだいる事を．．．

「おい！零ちゃん！無事かい？」

「うわっ！鈴吉さん！？アンタ何してるの？」

「えっ！？心配して駆け付けたんだよ！今は天界や魔界も封鎖しているし．．．」

「閻魔戦争を防ぐ為．．．って事？」

「さすが初代閻魔を継ぐ者．．．そうだよ！僕もしばらく地上にいるからよろしく！みんなで現世を守ろう！」

「分かりました．．．ってか柳姉ちゃんは？」

俺が鈴吉さんに聞くとニヤニヤしながら言った

「後にいる彼女の事かなあ？この幸せ者！」

「れい　私はここにいますよ？」

「あっ！柳姉ちゃ．．．ブハア！」

柳姉ちゃんは何故か白いビキニを着て、髪を後ろにくくった姿で立っていた

「右京、左京！結界よろしくお願いね」

「了解！門前流大結界・愛の巣！発動！」

「うわっ！て、テメエら！グルかよ！」

「零ちゃん？しばらく二人で楽しみな！折角のプールなんだからね？」

そう言われ、俺は結界に閉じ込められた

もちろん柳姉ちゃんと二人きりでね？

「零 とうかな？この水着？似合ってる？」

「当たり前だよ？柳姉ちゃん！」

「れっい！大好き」

「うわー！や、柳姉ちゃん！近過ぎだつて！」

「いいの 零は私のものだからねえ！」

まあいつか！

これから争いが始まるのだから……

少しくらい二人で和んでもいいよね？

そのじゅうに 覚醒の音色！？（後書き）

いかがでしたか？

少しシリアスになってきましたが、なるべくネタを入れていきたい  
と思います

そのじゅっさん 的島プールランドの伝説!?(前書き)

長く更新出来ずに申し訳ありませんm( ( m

今回は短めです

では、どうぞ!

そのじゅっさん 的島プールランドの伝説!?

的島プールランドにある飲食店『星の白金』の店長は焼きそば『時の覇者』を作りながら語る

「的島プールランドの伝説? ああ . . . アレかな? もう10年も前になるかな . . . .」

そう言いながら焼きそばを作る手が止まる

そして、タバコを一本だけ啜えて火をつけた . . . .

「お客さん . . . . この話はね? うちの店で伝説の大食い記録を持つ男『神崎零』の奇妙な人間関係の伝説だ . . . .」

俺と柳姉ちゃん

二人きりで結界の中で癒されていた

そして、何気なくいい雰囲気になって . . . .

何というか．．．

目の前に柳姉ちゃんの唇が近付いたその時だった．．．

ズガガガッ！

バリバリベリグシャ！

「う、うわぁ！」

「キャッ！な、何！？」

凄い音と共に結界が破られ、俺と柳姉ちゃんは現実世界に戻される  
そして、現実世界では衝撃的な状況だった

まず、鈴吉さんと幸助さんがプールで逆さまになり、『犬家』みたいになっていた．．．

そして、門前兄弟は二人の女性にボコボコにされて平伏している．．  
．．

最初は残りの神楽姉妹かと構えた

が、右の女性は黄金のハンマーを持った黄金に輝く水着の女性．．  
．

左の女性は背景に『バーン！』やら『ゴゴゴッ！』といった重  
苦しい文字が目立つ青い水着の女性

読者の皆さんは「ご存じのお二人でした

「アレ？紗香ちゃん？それに里咲？何してるの」

柳姉ちゃんがそう言うのと二人は恐ろしいまでの笑顔で振り向く

「柳さんお久しぶり・・・ヒロインの私に代わっていいご身分ね？」

「柳様？零さんは私と仮契約中です・・・正式に契約しに参りました・・・」

二人は恐ろしいまでの笑顔とオーラを発している・・・

ヤバイですよ

紗香は超怪力に勇者の力やら、ド根性やらのオーラが混ざり黄金のオーラに更なる進化をとげている・・・

里咲は魔界人の中でも本気を出せばトップクラスの戦闘能力を持つてると幸助さんが言っていた

そのオーラはもう軽くスタンドみたいになっている・・・

つか、柳姉ちゃん？何故、笑っていて動かないの？

「紗香ちゃん？里咲？悪いけど、私と零は本契約完了済みよ」

ズガンッ！

二人の顔が劇画チックに変わる……

柳姉ちゃん？てか、本契約って……確かに俺は一夜を共に過しましたけど……

「柳さん……貴女はヒロインの私を差し置いてなんて事を……」

「柳様……私がDT好きなのご存じですよね？」

いや、二人共に無茶言い過ぎでしょ！

てか、作者何し……

アレ？あそこで瀕死状態なの作者？

ヤベエ……作者まで拳で説得しに行ってたか……

「零が欲しいなら私に勝つ事ね 折角、地上・魔界・天界の三人が





そのじゅうさん 的島プールランドの伝説！？（後書き）

いかがでしたか？

作者の都合で更新が出来ずに申し訳ありませんm（　　）m

次回は的島プールランドの伝説が明らかに・・・

そのじゅうよん セクシージェットストリームアタック!? (前書き)

今回の島プールランドの伝説は完結です

パロディーネタを入れているので気付かれるとうれしいです!

そのじゅうよん セクシージェットストリームアタック!?

飲食店『星の白金』の店長は懐かしそうな顔をしながらタバコを吸い終えた

そして、急に黙って焼きそばを仕上げにかかる

「お客さん？悪いね．．．どこまでを話したのかな？そうだ．．．  
．．．今からが大事な所だったな．．．まあ、焼きそばでも食べな！  
俺からのサービスだ．．．」

そう言い、名物である焼きそば『時の覇者』をテーブルに置くと店長は再び語り始めた．．．

「はい！僕の出番、ドロー！『神崎零争奪サバイバルバトル』の実況は四代目神様こと『遊王』鈴吉と．．．」

「最高にハイってやつさ！幸助さんだよ！貴様見ているなああああああああああ！」

「幸助さん！見てもらわないと困るよ！つてか鈴吉さん．．．遊王って．．．」

「零ちゃん？そこら辺は気にしたら負けだよ？」

「そうだぜシーザー零！これから祭りが始まるんだ！最高にハイにならずにどうする！」

犬 家状態から助けてやったのに、この騒ぎに便乗しやがって．．

『神崎零争奪サバイバルバトル』のルール．．．自分の名前のついた戦いを説明するのは恥ずかしいが、ようするに俺の所有権をかけて戦うらしい．．．

俺を倒した者が俺の所有者．．．というか恋人になるらしい．．

人権無視にも程があるだろおおおがああああああああああああああああああ！

「柳さん、里咲ちゃん．．．この戦いは譲れないわ！ヒロインは私のもものよ！そして零くんと．．．ブハアッ．．．」

紗香．．．何、想像してんのさ．．．

「柳様、紗香さん．．．フルパワーの私は誰にも負けないわ！そして、零さんと．．．ブハアッ．．．」

ちょ！里咲さん！あんたもかい！？

「紗香ちゃん、里咲．．．零は私の虜よ？このパーフェクトボディが有る限り私は無敵よ　そして、零と今夜も．．．ブハアッ！」

何となくそんな気はしたが、やっぱり柳姉ちゃんもかい！？

「グフフフ．．．誰にも負けないわあああ．．．」

こ、怖ッ！三人とも鼻血を撒き散らしながら禍々しいオーラが放たれている．．．

結界系の門前兄弟も必死にオーラに耐えてるよ．．．

外に漏れたら大惨事だもんなあ．．．

「うゝん．．．それじゃ始める前に零ちゃんへPRタイムどうぞ！」

鈴吉さん．．．それ必要ですかね？

「山井紗香です！私が勝ったら朝まで零くんの勇気と努力と根性を確かめたいと思います！そして、ヒロインへ．．．」

紗香．．．最後、ドクエのサブタイトルみたいになってるよ．．．

「城星サリサル里咲です！一回や二回の本契約なんてまだ間に合います！私が勝ちましたら、朝まで生ジョジョしたいと思います！」

ちょ！里咲さん！何！？生ジョジョって！？何をする気ですか！？

「閻魔柳です 初めて見た時から零が好きでした．．．私が勝ったら１７０年で培ったテクニクを駆使したいと思います」

そっいえば、柳姉ちゃん１７０歳だったあああああああああああああああ！

誰もそんな細かい設定覚えてないだろ！



「ああ．．．古代より女が三人集まりし時、目的に深く一致し駆け抜ける時に発現する伝説の大技だ！」

「オーマイガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！では避けられぬ！」

「そ．．．だね？形状は初代ガ ダムよりS EDに近いが、威力は段違いだ．．．踏み台とかしたら多分、足がもげらると思うよ？」

ふざけるなああああああああああああああああああああ！

回避不能とか言われたらもう．．．

「シーザー零は『絶望だねえええええ！』と心の中で言う！」

．．．

何で分かるんだ？

ってかどうする？

オーラが密集し過ぎて水着がずれないくらい強固な技だ．．．

どうする、俺！！

1 えっ？死にたくないから逃げる！ってかふざけるな！

2・逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ  
逃げちゃ駄目だ逃げちゃ……駄目っすよね？

3 パ  
ラッ  
シュ  
・  
・  
・  
僕、  
もう眠くなっちゃった  
・  
・  
・

駄目だああああああああああああああああ！

頭の中がネガティブでいっぱいだ！

まるでウツプになった気分だぜ……

待てよ．．．ウ ツプならここからキャプテンウ ツプになるじやないか！考えるんだ俺！

「な、何だアレは！？鈴吉！シーザー零のあの構えは一体？」

「あ、あれは！奈良シカルが将棋を打つ時の構えだ！」

「な、何だと！でもシーザー零はIQがそんなに高くないから意味がなくないか？」



「零ちゃん！ここでケルベロス三姉妹を特殊召喚だ！」

「一応、シーザー零の専属守護姉妹だからね？しかしどうするんだ？」

「久々に出番だわ！零お兄様ありがとう」

「何の用だ零お兄さ．．．零兄貴？」

「零兄ちゃん呼んだ？ボクの出番だね！」

「お前ら．．．次話でどんな展開でもメインはらせるからシンク口してくれ！」

「私がメイン」

「メインだと．．．」

「わーい！ボクもついに主役だあ！」

三人は少し妄想にふけり、そして鼻血を噴出し、心が一つになっていた．．．

「時間を稼げよ我が義妹達！すぐに終わらせるからな！」

「任務了解．．．目標、柳様・里咲様・紗香さん．．．セ



「う、うん．．．」

ごめんね紗香．．．

お前が意外にこういうの知ってたんだ．．．

「すまない．．．閻魔暗殺拳秘奥義・零距离快樂絶頂流舞拳！！」

「キャ．．．そんな．．．お預けだなんて．．．」

バタッ

よし！紗香クリア！

「おーと！ここで紗香選手脱落だあ！」

「残りは柳様と我が妹にして最強の魔界人である里．．．グヒヤ  
」！」

「うわっ！里咲お嬢！本部席襲撃は駄目だよ！」

「すみせんね鈴吉殿？少しばかりお兄様を借りますね！」

「ぬわあ！り、リサリサ！何だ！何をする！？」

「いいから黙って力を貸しなさい！強制封印・南無！」

「ギャアアア！」

「二人はどこだ？ちくしょう！紗香に時間を取り過ぎたかな？」

「零さん？私ならここにいますわよ？」

「り、里咲さん！」

「悪いですが、裏技を使わせて貰いますわ！」

そう言つて里咲は左手を突き出した……

「我が左手に眠りし兄よ……今こそ、その力を示せ！」

二ヨキ！

いや、それ『兄』じゃなくて『鬼』じゃ……って！幸助さん！

?

何してんの！あんだ解説でしょ！何、妹の左手からニヨキって出て来てるの！？

「零さん！ 覚悟！」

「これ寄生形スタンドだから！シーザー零！成り行きだが、覚悟！」

意味分らない事言っ  
てんじやねええええ  
えええええええええ

ええええええ！！

「ヤベエなこれ・・・どうしよう?」

「零！助太刀するわ」

柳姉ちゃん！？

「閻魔暗殺拳・封の巻奥義・武羅邪発動」

「この技は．．．柳よ．．．さすがだな！閻魔暗殺拳を作り上げたあの者の技を使うとは．．．」

な、何だこの技

相手を完全に包囲するとても温かい気

俺の心に響いて来る  
・  
・  
・  
・

そして、俺は無意識に技を放っていた

「閻魔暗殺拳・合体奥義・裁きの涙！」

裁きの涙

この技は武羅邪を發動した相手にのみ効果を発する

主に精神を攻撃する技であり、同時に邪心を砕く秘奥義である

「そんな……な……零さんを食べたか……った……」

「シーザー零！俺は無関係だあああああああああああああ  
ああああああ！」

「残るは柳のみとなりました」「神崎零争奪サバイバルバトル」最後はどうなる!？」

「ありがとう柳姉ちゃん……助かった」

「ねえ．．．零？私の事．．．好き？」

「えっ？好きだよ．．．だから本当は戦いたくはない．．．」

「本当に『私』を好きなの？柳の事を．．．」

「ああ、俺．．．神崎零は閻魔柳を世界で一番愛してます！」

柳姉ちゃんは後ろを向いて言った．．．

「私の負けね．．．だって私も零を世界で一番愛してますから倒すなんて出来ないわ．．．」

そう言つて柳姉ちゃんは俺に近付きキスをした．．．

という事で決着が付いちゃいました

「優勝は零ちゃん！おめでとう！商品は『神崎零』所有権と的島高校生徒会長の座！そして．．．負けた人の所有権です！」

「はい？負けた人の所有権って．．．」

「引き続きトライアングルの真ん中で頑張って！」

そ、そげなああああああああああああああああああ  
！！

この時、諦めていた紗香と里咲の瞳がキラリと輝いたのはいつまでもない．．．

「という話だ．．．面白かったか？あん？何が伝説か？．．．あそこ見て見なお客さん．．．」

店長が指を示したさきには大きな岩があった．．．

「その時の戦闘でな．．．あの岩．．．元はもつとデカかったんだが削れてな！よく見る文字が浮き出てるだろ．．．」

そこには、こう書いてあった．．．

『セクシーバイオレンスアクセス数一万二千突破しました記念』

「作者が言ってたよ．．．これからセクシーバイオレンスをよろしく願いますだよ．．．今までヒットした作品ないからな．．．うれしいんだろ．．．」

的島プールランドの伝説

それは、読者の皆さんが作ってくれたこの世界の伝説であった

そのじゅうよん セクシージェットストリームアタック!? (後書き)

いかがでしたか？

伝説の正体は読者の皆さんが残してくれたものでした(笑)

次回はケルベロス三姉妹がメインです

作者に感想などを頂けると有り難いです^^

そのじゅうご イチゴのもう一人のご主人様、メロンの秘密

私は目覚めて初めて気がついた・・・

悪夢を見て、涙が出ている事に・・・

私の名前はイチゴ

今は三姉妹の長女として零お兄様専属の守護をしている

そして悪夢から目覚め、今日があの日であつた事を思い出した・・・

「あつ・・・今日はラーガン様の・・・」

コンコン！

部屋をノックする音がして零お兄様が顔を出す

「あら？おはようございます 零お兄様、どうかしましたか？」

「大丈夫か？何か物凄く悲しげな魔力を感じたからさ？どうかしたか？」

お見通しか．．．

私は零お兄様に下に降りてから話しますと言い一階のリビングへと降りた．．．

一階へ降りた私はまず、緑茶をいれて零お兄様に差し出した

これは、いつもの日課みたいなものです

「ありがと！んで、どうかしたか？悩みがあるなら聞くよ！」

「悩みというか．．．何というか．．．言っても驚きません？」

「驚かないから言ってみるよ？」

私は少しだけ大きめに深呼吸をして答えた

「命日なんです」

ブハアアアッ！

私はとびつきりの笑顔で答えてしまい、それを聞いていた零お兄様は熱いお茶を吹き出す

「だ、大丈夫ですか零お兄様！？でも、驚かないって言ったじゃないですか！！」

「ば、馬鹿野郎！笑顔で朝っぱらから『命日です』なんて言われたら、茶も吹き出すわ！ってか誰の命日なんだ？」

そう言つて、零お兄様は再びお茶を飲み始める

「え〜と．．．零光様に仕える前に仕えていたラーガン様と．．．ケルベロスになる前の私の命日です」

ゴフアアアッ！！

あつ、またお茶を吹き出した．．．

しかも今度は気管に入ったみたいで苦しそうな零お兄様．．．

ああ．．．こんな姿も可愛らしくて．．．母性本能がキュンって来ちゃいま．．．

ドッゴン！

「いったゝい！！零お兄様！拳骨は酷いデスヨ」

「お前は俺を暗殺するつもりか！？全く・・・どいう事か話してみろよ？」

「はゝい！わかりやすく説明すると、私は一度死んでいます」

「じゃあ、なんでイチゴは生きてんの？」

「私が仕えていたラーガン様は不死王と呼ばれる魔界トップクラスの方で、瀕死の私をその当時は私の使い魔だったメロンと蓮を媒体にして新種のケルベロスに進化させる事で魔界人としての私は死にケルベロスとして転生しました」

「あつ？じゃあ、メロンと蓮って妹じゃないだろ？」

「一応、ケルベロスになった時点でラーガン様が姉妹の手続きをしてくれましたから姉妹です　まあ、二人は覚えてないように記憶をコントロールしてありますけどね」

それを聞いた零お兄様は軽く顔を引きつらせている

「お前って実はハラグロなんだな？（笑）」

「違いますう」

「まあいいか！んで、ラーガン様ってどんな方だったの？」

「ラーガン様ですか？先ほども言いましたけど、不死王と呼ばれる魔界人です。ただ、全てを燃やし尽くす『紅蓮眼』という瞳術を得意としてましたよ。」

「紅蓮眼を使うラーガンさんでいいのかな？」

「ええ！そうですう。」

「その人、ドリルを出したりする？」

「いえ、ドリルは出したりしないと思いますう。」

そう言うのと、零お兄様は少し目を閉じた

そして、目を開けると私の頭を軽くなでてこう言った……

「零光さんが墓参りに行きなさいってよ？」

「ええ！零光様が！？完全に転生したんじゃないかなかったですか！？」

「たまに調子がいいとアドバイスをくれるんだよね？とりあえず、行つて来なさい！」

そう言つて、零お兄様は私を優しく抱き締めた……

ああ．．．この優しさは．．．零光様と変わらない優しさ．．．  
いつも私の事はお見通しなんだな．．．

《朝7時・イチゴが魔界へ出発》

「やれやれ？手間がかかるね妹って？」

何を独り言してるんです神崎零？

「零光さんに話をしてるんですよ？完全に転生したんじゃないんですか？さつきはイチゴに、調子がいいと会話が出来るって嘘ついたりですよ？」

実は私にもわかりません．．．恐らく、神崎零の力が低下したためだと思います

「えっ！？それ、マジっすか？」

ええ、マジですよ？とりあえず、今日は体を私に預けなさい！恐

らく明日には全て回復しているでしょう

「わかりました．．．そらじゃ、今日一日は体を貸しますよ!」

こうして、閻魔零光が一日だけ復活が決定した．．．

丁度その時、蓮が起きたようで一階へ降りてきた．．．

一時間後．．．

メロンが起きて、一階へ降りて来ている時にそれは起こった

「わああ! あっ! ダメ! ダメだよ! 零お兄ちゃん!」

「何がダメなのですか? こちらのの方が良かったですか?」

「あんっ! もっとダメエ! このままだとボク．．．」

ドッシャーン!!

ドアを蹴破りメロン参上

「貴様ああ! 私の妹に何をし．．．」

「ダメエ! 死ぬ! 頑張ってリ ウ!」

「これで終わりです！ザン エフ！ファイナルアトミックバスター  
！！」

「うわあ！負けちゃった．．．ズルいよ！もう36連敗だよ！」

「蓮？勝負とは非情なるものなのですよ！ん？おはようございます  
メロン？どうしたのですか？ドアなんて蹴破って？」

プルプルと震えるメロン

最近バストアップした胸も激しく揺れている．．．

「朝から紛らわしい事をしてんじゃないわよ！この鬼畜外道がああ  
ああ！！」

ガチッ！

「なっ！？う、受け止めた！？私の膝蹴りを？」

「おやおや．．．このペースだと、神崎零はフルボッコですね？」

「はあ？貴様？頭がついにイカれた．．．」

「メロン？それが主人に対する態度ですか？」

声のトーンと微妙なニヤけ顔を見たメロンは無意識のうちにひざまずいた……

「も、申し訳ございません！零光様！！」

しばし沈黙のメロン

ゆっくりと顔を上げ、顔を斜めに傾けて目をパチクリとしている

ちなみにメロンはパニックるところなる

「あの？まさか！？そんなはず不是吗？零なんだろ？ふざけんなよ？（笑）」

「蓮？メロンはいつもこんな口調なんですか？」

「違うよ零お兄ちゃん！じゃなかった！零光さま！」

『零光』という単語にビクつくメロン

「ええ！なんで！零光様ああああ！？あの馬鹿はどうしたんですかああああああああああああああああ！！？」

「今日は神崎零の力が低下しているので、それを補う形で魂が私を

「一日だけ復活したんですよ?」

とか、デタラメな事を零光さんが言っていると、急にメロンは弱々しい表情になった

「あの馬鹿・・・消滅したりしませんよね?」

「メロン・・・とりあえず、『馬鹿』は止めなさい?一応、私も同一の魂なのでいい気はしませんよ?」

「す、すみません・・・」

「消滅はしませんよ・・・恐らく、わたしが封印した『鬼神』の力がわたしを再び表に出したんでしょう・・・」

「鬼神の?力ですか?」

「ええ・・・わたしが妻もろとも零影を転生させた忌まわしき力です・・・」

「リア様と零影を・・・しかし、零影はまだ生きていますよ?」

「恐らく、零影は我が親友の技を使い復活したんです・・・不死王ラーガンの時空転生術を・・・」

「ラーガン?その方はどんな方なんです?」

「そうでした・・・記憶をコントロールしていたんですね?」

「えっ？なんですか？もつと大きな声で言っして下さいよ？」

「何でもありませんよ．．．それよりメロン？今日の夜に神崎零に戻るまでに『兄』と呼べるようになりなさい！」

「なっ！ちよつと！それとこれとは話が別．．．」

「蓮？メロンの秘密聞きたいですか？」

「聞きた〜い！」

「実はメロンの初恋の相手は．．．」

「ギイヤーアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！  
れ、零光様ああ！それだけは勘弁してください！！」

「じゃあ、神崎零を『兄』と呼ぶようにしてくださいね？」

「わ、わかりましたよ！呼びますよ！」

メロンは観念したようにうなだれた

「それでいいで．．．」

突然、零光は真面目な顔になった

「な、なんですこの魔力は．．．まさか．．．生きていたか！  
ラーガン！」

《魔界・元ラーガン城》

私はラーガン様が亡くなられた場所に着いた

何故か懐かしい．．．もう、あの方はいないのに．．．ラーガ  
ン様の匂いがする．．．

「帰って来たんだ．．．あれ？誰がいる？」

私はラーガン城の玉座へ向かうとそこには忌まわしき力をもつ3人  
がいた．．．

「やはり来たね！ケルベロス！いや、不死王ラーガンの片腕『衣血  
子』さんの方がいいかしら？」

か、神楽メア！

「これが『ブラッドクイーン』の衣血子なんだ……」

「美味しそう……メア姉！モア姉！ミア早く食べたい！！」

「ミア！焦らないの！まず、この神楽モアが撃ち殺してからよ……」

ま、まずい！幻術使いのメアだけならともかく『スナイパー』神楽モアと『破壊者』神楽ミアもいる……

「……さあ、処刑の時間よ！踊りなさい！」

## 《神崎家前》

「久しぶりだな零光」

「生きていましたか！ラーガン！しかし、その姿は……」

そこにいたのは島の高校教師バスケット部コーチ『又垂』であった．．．

「ギリギリの所で時空転生術を使つてな．．．何年か前まで人間として生きていたのさ．．．」

「では、記憶は？」

「ああ．．．時空転生術を使つたさいに魔力が足りなかったせいで先日まで記憶が戻らなかったんだ．．．」

「そうか．．．今、イチゴがお前の城へ墓参りへ行っているぞ？」

「悪魔闘神の三獣獅が行方不明になったのちに零影により俺は処刑されかけ時空転生術を使った．．．」

「そうとは知らず、第一次閻魔戦争が起こつた．．．」

「零影は私の時空転生術を見て学び、零光の裁きから逃れたのだと思う．．．」

「すまない．．．リア．．．お前は私のせいで．．．」

その時、二人は膨大な魔力反応を僅かに感じとる．．．

「これは．．．神楽姉妹の魔力でしょうか？場所は魔界側からで

すね!」

「零光!お前は地上に残れ!俺が行こう!この魔力……我が城より放たれている!」

「ではイチゴが……頼みますねラーガン……」

《魔界・元ラーガン城》

「ハアハア……」

「どうしましたの?ブラッドクイーン?」

「メア姉さん!弱すぎるよコイツ!」

ドッヒューン!

「誰が弱いつて?」

モアは魔力を様々な形で撃ち出す力を持つ



「「死ね！ブラッドクイーン！」」

さようなら．．．

零お兄様．．．

「紅蓮眼！！」

グウオオオオ！

「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」」

「諦めが早いな？イチゴ？私はそんな弱い奴を片腕にしていたかね？」

「ラ、ラーガン様！？でも、その姿は？」

「今、人間として生きていてね．．．先日までラーガンとしての記憶がなかったのだよ．．．」

「き、貴様ああ！ラーガン！よくも私たちをやってくれましたね！」

「おや？神楽メア？まだ息があるのか？しぶといね？」

「ナメては困りますね．．．我が妹二人を取り込んで防ぎましたのよ！」

「そうか．．．悲しい女だ．．．イチゴ？後は頼む．．．」

「わかりました！後は私が決めます！」

「うるさいわ！死に損ない！私は神楽メア！お前何か．．．」

「うるさいわ 喋り過ぎよ？これで終わりにしてあげる．．．」

そう言ってイチゴは手の平より真紅の魔力を放ちメアにヒットした

「な、なんだこれはああああああああ！！か、体の中を暴れて．．．」

赤き光を放ちメアの体から血と混ざったイチゴの魔力をが花のように咲き乱れる．．．

「さようなら神楽姉妹．．．でも、良かったわね 私が何故ブラッドクイーンと呼ばれていたか身を持つてることが出来て．．．」

《神崎家》

あれ？俺、何をしてるんだっけ？

たしか零光さんに一日体を預けて．．．

ってか、ココ風呂か？

「ゆ、湯加減はどうだ？丁度いいか？」

「ああ．．．丁度いい．．．って！メ、メ、メロン！？」

湯船につかっているおれにタオル一枚のメロンが話しかける．．．

ちよっ！零光さん！アンタ！何してたの！？

「零．．ま」

「ん？な、何だ？メロン何か言ったか？」

メロンは顔を少し赤らめて言った

「零お兄さま．．．お背中お流しします」

お、お兄さま！？

どうしたメロン！？

「な、何があったメロン！？どうしたんだ！？」

「う、うるさい！いいから早く来い！」

メロンはいつもの乱暴さで引つ張る

ただ、やっぱり恥ずかしいのか目を背けててを伸ばしたせいでとてもないところを引つ張っている．．．

そう、俺の大事なリトルジョン大佐を！！

「ギイヤアアアアアアアアアアアアアア！！メロン！そこは洗わないでいいから放せえええええええええええええええええええええええええええ！！！」

しかし、まだ目を背けているメロンは気がつかない……

「遠慮しないで！私が零お兄たまをしつかり洗いますから」

「わかった！だからメロンさん！？頼むからお兄『たま』を放してくれるかなあああああああ！！」

「わかりました……放しま……」

はい、搦んでいたリトルジョン大佐とご対面  
そして、顔をさらに真っ赤にするメロン

「ご、ご、ごめんなさい！お兄たま！」

「いいから放してくれなあいあああ！？」

その後、メロンは丁寧に背中を流してくれてどうにか無事に風呂を出た……

しかし、またスタイル良くなってたな……

そして、俺は部屋に零光さんから俺宛に手紙を見つけた

神崎零へ

君のご好意で今日一日、あなたの体を借りたおかげで旧友に会う事ができました

本当にありがとうございます・・・

そして、忠告です

神崎零の中に私が昔に封印した『鬼神』の力が眠っています・・・

その力は決して使わないようにしてください・・・

閻魔零光より

「零光さん・・・俺に眠る『鬼神』って一体・・・」

手紙を読み終えた時に小さな文字でこう書いてあった・・・

忘れていましたが、メロンの秘密を教えます

どうやら初恋の相手は神崎零のようです

では、さようなら

はい？

なんだって？

俺が初恋の相手！？

何だそれ？

ちょっと待てよ……

トントン！

「零お兄さま、一緒に寝ていいか？」

な、何ですと！

良く見ればメロンはパジャマ姿だが．．．ノーブラだ．．．

間違いない．．．

あの感じ．．．付けてないよマジで！

「ああ！ズルイ！メロンお姉ちゃん！僕も一緒に寝る！」

な、何いいい！？

蓮も寝る気かあ！？

「あら？今日はモテモテね零お兄様」

「お、おかえりイチゴ．．．」

両腕に抱き付いているメロンと蓮を見て微笑むイチゴ．．．

まずい．．．

イチゴがこの悪魔の微笑をみせたという事は．．．

「私も一緒に寝ます」

やっぱり……

まあ、いいか……

今日は柳姉ちゃんも閻魔界に帰ってるし……

鈴吉さんの世話にはならないでしょう！

「わかった！みんなで寝るぞ！リビングに布団持って行け！」

「やった！久々にボクと寝てくれるんだ！」

「な、何！お兄さま！？どついう事？」

いや、蓮は小さいころ犬だったから一緒に寝ただけだ！

「私も久々ですわ！」

「な、何！？私だけが寝てないのか……」

やばい……

怒りのオーラがメロンから放たれている……

「お、落ち着け！メロン！今日は一緒に寝れるだろ？」

「お、お兄たまの．．．馬ああああ鹿ああああ！！！！」

「ギイイイイイイイアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

## 《天界・神の家》

「あれ？零ちゃん！どうしたの？こんな時間に．．．」

「あの．．．今日は朝まで泊めてくれませんか？」

「ん？泊まるの？別にい．．．」

「鈴吉？何してるの？早く寝ようよ！」

「あれ？今の声ってリサさんじゃあ．．．」

「いや！そんな声は聞こえなかったよー？」

「り・ん・き・ち！はやく！体が冷めちゃうよー！」

「り、鈴吉さんとリサさんってそんな関係なんですか？」

「うーん．．．ということで零ちゃん！パイルダーオン！」

「ちよつ！鈴吉さん待つ．．ギイヤアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「！！！」

何だかんだで俺は天界を追い出された

俺って確か、本作の主人公だよな？

[illegible]

そのじゅうご イチゴのもう一人のご主人様へメロンの秘密（後書き）

いかがでしたか？

本当に更新が遅くてすみません m ( \_ \_ ) m

そろそろ話は終局に向かう予定です！

よろしく願います

そのじゅうろく 光と闇でか、一年以上も更新しないでスミマセン!?(前書

今回は紗香目線です

ついに、零との出会いが明らかに・・・

そのじゅうつろく 光と闇てか、二年以上も更新しないでスミマセン!?

光と闇

対極する二つの理

だが、光無きところに闇は決して無いのだ……

光が激しき時、それは闇もまた激しく動き出す……

本作のサブヒロイン的存在である紗香は悩んでいた

何故、零が自分を選んでくれないのかと

「私、女としての魅力がないのかあ？」

朝早くからシャワーを浴びながら彼女はそんな事を考えていた

鏡の中の自分はそれなりに美しい分類だとは思う

だが、酷く自信を失っている自分の顔は妙に恐ろしく見えた……

顔とスタイルは周りの女に負けていない

最近、胸は大きくなりウエストは更に細くなった

真面目で弱い者を見ると助けなければいけない性格

自分の知らないところで意外にモテるらしい

それが自分のはず

でも、最近違う気がしてきたのである

鏡を見ると違う自分がいるような……そんな気がするのだ……

紗香はシャワーを止め、風呂場から出ると決意した

「零くんは柳さんの事しか見えてないなら、私は私を磨くだけ！」

彼女が零に固執する理由は中学にまで遡る

《過去・的島中学入学式》

「ハア、校長先生の話ってどこも長いなあ？」

「そりゃそうよ？てか、あの先生格好良くない！？」

「本当だ！？さすが中学は違うね？・・・てか、紗香は？」

「ん？うわっ！すごい爆睡してるし！」

昨日、怖いビデオを見たせいでなかなか寝れなかった私は、入学式で爆睡していた

そんな中、物音と叫び声で目が覚める

ゴチンッ！！

「びゃっ！？い、痛ってえ！？な、何だあ！？」

叫び声の方を見ると、男の子がヤクザのような体育教師に拳骨を食らったみたいだ

多分、寝てたんだろう

「コラっ！入学式から寝てんじゃないぞ！この後、職員室に来い！」

「うゝ．．．マジっすか？分かりましたゝ」

うわっ！かわいそうだなあ．．．

そう思っていた私の方を不意に体育教師が見て叫ぶ

「その女子も寝てたな？君も後で職員室に来なさい！」

最悪．．．

何か応接室みないなところに男子と二人で座らされた……

「君らは……え」と神崎君と山井さんは何故寝てたんだ？夜更かしか？」

神崎って男子が答える

「す、スミマセン……昨日の夜に『伝説じゃない！本当の呪いのビデオ』ってやつみたら眠れなくなつて……」

！！！！？

それ！私が昨日見たやつじゃないの！？

「ああ！あのビデオか！マジでヤバイよな？先生は独りじゃアレ見れんからな？」

ちよっ！先生！？

「あつそうなんスか？アレの最新号が出たんでかりたんですけど、ヤバイですよ！てか、44巻までよく続きますよね？」

ん？最新号が44巻？

「ねえ？え」と、神崎くんだけ？」

「ん？な、何です？」

「アレの最新号って43巻じゃないの？」

「違うよ？43巻とほぼ同時に44巻が出たから知らない人は多いけど……」

「ええ！？そうなの？私、知らないで昨日43号見ちゃったわ！」

その言葉にヤクザみたいな体育教師は驚く

「き、君もアレを見たのかね！？先生なんて、30巻のキ肉バスターしている霊で、ビビりまくったのに！！」

「やだ……先生？43巻では、阿羅バスターする霊や地獄の断台をする霊、キ肉ドライバーをする霊でしたよ……」

「ギャー！そ、そんな恐ろしい霊がいるのか！？」

先生……マジ泣きそうになっている

ふと、神崎くんが不敵に笑い出した

「フフフ……先生も君も甘いな……44巻ではマ  
ドッキングする霊が出ていたんですよ……」

「「な、何ですとおおおおおおおお!?」」

お、恐ろしすぎる!

それを一人で見たと言っのこの神崎くんは!?

「そ、そりゃ寝れなくなるな……よし!君らは教室に戻ってよ  
し!……というか、急いで戻りたまえ!」  
んっ?どうしたんだろ先生?急に素直に……

「あっ!わ、わかりました!失礼しました!」

そういつて彼は私の手を握りしめて部屋を飛び出した……

「ちよっ!ちよっ!何をするの!離して!」

「あっ!ゴメン!」

気まずい空気が流れる

「ええと？山井さん？だっけ？ゴメンね？」

「・・・・・・別に」

「怒ってるよね？本当にゴメン！何か、俺に出来ることある？」

「特にないです・・・・・・なんで急に部屋を出たの？」

しばらくの沈黙の後に彼はこう言った

「先生がね・・・・・・パンツにデッカいシミを作ってたから・・・・・・」

それを聞いた私は呆然とした後に笑いが止まらなくなった・・・・・・

「そ、それじゃあ仕方ないわね！逆にありがとう！」

「いや、気にしないで！俺たち教室が一緒みたい！ゆっくり行こうか？」

「うん！あつ！改めまして！私、山井紗香！」

「俺は神崎零だよ？よろしく山井さん！」

「うん！私のことは紗香と呼んで？二人だけの秘密も出来たしね？」

《現在・紗香の部屋》

そうだ・・・あのときからなんだ・・・

私の心の中に彼が住み着いたのは・・・

ずっと一緒にいたから、彼が死にかけたあの時まで気づかなかった

私、神崎零が好き

愛してる

でも、もう彼にはこの気持ちが届かないのかな？

もう嫌だよ・・・

ヒロインになりたいのは目立ちたいからじゃないの・・・

貴方のそばに、すぐ横にいたいだけなのに……

「ええい！止め止め！暗い女は私には似合わないわ！」

そう自分に言い聞かした紗香はふと気づく

「アア！ヤバい！99巻の返却忘れてた！」

そう言う彼女は急いで身支度を済まし、家を出た

その光輝く後ろ姿は、いまや誰が見ても美しい女性だった

だが、今はまだ彼女すら知らないのだ……

その光は偉大なる闇を含んでいることに……

そのじゅうろく 光と闇、てか、二年以上も更新しないでスミマセン!?(後書

いかがでしたか?

更新せずに二年もたってしまい本当に申し訳ないですm(\_\_\_\_\_)m

私生活の忙しさなどで一時期、存在自体を忘れていました(。o。;  
)

出来れば1ヶ月に一度以上のスピードで更新したいと思います(。。  
-:~)

ご意見・ご感想を頂きますと嬉しいです^^

今回は、再び紗香編でございます

そのじゅうなな 破壊の巫女への発動承認！？（前書き）

今回は早めに投稿させていただきました（-.-;）

引き続き紗香目線です！

ご意見・感想など頂ければ嬉しいですm（-）（-）m

そのじゅうなな 破壊の巫女への発動承認！？

世の中には目には見えない出来事が存在する

現代の科学では『それ』を認めようとしない……

不確かなモノだから

でも『それ』は不確かながら、存在するのだ……

きつと、それはアナタのそばにもいる……

紗香は町にある某レンタルショップに来ていた

レンタルしていた『伝説じゃない！本当の呪いのビデオ！』シリーズの99巻を返却しに来たのだ

実は、この店の店長は紗香を『伝説じゃない！本当の呪いのビデオ！』シリーズを全巻借りている唯一の客として、特別扱いをしている  
見たい映画などがあれば、特別に予約などをさせてくれる優しい店

長なのだ……

実は、その店長に99巻をレンタルする際に紗香は頼まれていた事があった……

店舗の模様替えと大掃除のために一日だけ早くレンタルした商品を返して欲しいと

そのために紗香は急いでレンタルショップに来たのだが……

「あれ？お店、閉まってるじゃないの！」

急いできたおかげで、指定された時間より少し早く来た紗香だったが、店は閉まってるようだ

仕方なく、裏口の方へと周りこむ紗香

すると、裏口でそわそわしている店長を発見した

「あっ！店長さん！」

「ウワァー！！……な、何だ？山井さんじゃないですか？驚かせないで下さいよ」

「あっ！ご、ゴメンナサイ！……こんなところでどうしたんで

すか？私、99巻を返しに来たんですけど？」

紗香がこう告げた後に店長は申し訳なさそうに、そして恐る恐ると答えた……

「実はね……この間、防犯ビデオに映ったんだよ……ブリッジをする霊がつー！」

「ええ！？そ、それって伝説シリーズで追いかけてる『プロレス霊』の一種じゃないですか！？」

「そうなんだよー！それで、伝説シリーズの編集部に連絡してみたらね？今日、来てくれるようになったんだよ？おかげさまで、模様替えと大掃除は一日延期だよー」

それで、お店を閉めて裏口で待っていたのか！と紗香は思った

数分後、申し訳なさそうに一人の男が現れる

「すみませーん！遅くなりました！」

こゝこの話し方は！

紗香はこの時、尋常じゃないほど興奮していた

例えるなら、付き合い始めて1ヶ月目で女の子から初めて「今夜は帰りたくない……」と言われた男の約23倍ほど興奮していた・

「あ、あ、あな、貴方様はもしや！現場への突入は当たり前！数々の危険な撮影の中、奇跡的なレポートを体現してきた『大山田 淳』（おおやまだあつし）様ではナイデスクアアアアア！！！！！」

「そゝすよゝ？あれ？店長さゝん？話ではゝお一人で待ってるってゝ聞いてたんですけどゝ？」

「す、スミマセン！彼女は用事で私が呼んだお客様でして……その……実は、当店の伝説シリーズ全巻完全レンタルをされた山井さんです！」

「マゝジですかゝ！？じゃあ、今日はゝ気絶するかもねゝ？」

気絶！？何故、私が気絶するの？と紗香が思っていると何か不思議な音がしてきた……

カシャ……カシャ……カシャ……

「ああ～来た来た～！お疲～れ様で～す！」

こ、この音はまさか！

紗香はこの時、尋常じゃないほど興奮していた

例えるなら、付き合い始めて1ヶ月目の女の子が初めて家に来て「ねえ・・・シャワー浴びてきてもいい？」と言われた男の約42倍ほど興奮していた

「あ、あ、あなな、貴方様はもしや！！」『怪現象は編集室で起きてるんじゃない！現場で起きてるんだ！！』の名言と数々の現場にて霊を浄霊に成功させてきた監督の・・・」

「・・・」

わなわなと説明する紗香を見つめ不思議な足音を鳴らす彼は立ち止まり静かに見つめる

「あ～！君～やっぱり知ってたんですか～？この人が～監督の・・・」

「こんにちは。初めまして、月影 つきかげひかる 光です。」

その冷たく、クールな声を聞いた紗香は興奮のあまり『そ、創世王  
おおおおおおお！?』と叫び気絶した

10分後、紗香は店の事務所で気がついた

目が覚め、すぐに目に入ってきたのは『創世王』と紗香に呼ばれた  
月影の顔であった・・・

「おや？気がついたかね？すまないね？驚かせてしまって。」

何が起こっているのか解らない紗香は自分が月影の膝枕で寝ていた  
ことに気づいた・・・

「わ、わあああああああああ！?す、すみません！?わ  
た、わた、私！とんでもなくご迷惑を・・・」

顔を真っ赤にして紗香は勢い良く飛び起きる

「はははっ。気にしないでくれ。私のせいで気絶したのだ。また、気絶したら私の膝枕で寝てもらうよ。」

「そ、そんなこと！私、全国の創世王ファンに呪い殺されてしまいますよ」

何を隠そう、この月影はファンクラブができるほどの人気がある人物  
彼が作品中に出た品は常にレンタルなどされているために入手困難  
なのである……

ちなみに、紗香は会員No.444番である

「本当に全巻を見ているのだね。唯一、私が創世王と呼ばれた巻を見ているとは……」

「は、はいいいいい！！あ、あの『62巻』特別編・浄霊』は私にとってベストバトルです！」

「ほう……あの凄さが、君には分かるのかな？」

「はい！……その……私にも、少し力があるので……」

「そうなのかね？……では、後で少し力を見せてもらおうかな。」

「……いや、もしかしたら今、必要かも知れないな……」

ええ！？と紗香が叫んだその時、店内から叫びが聞こえた

それは店長の声であつた

その後、大山田がしっかりとした声で叫ぶ

「プロレス霊確認！監督！御願います！！」

ちなみに大山田は霊を発見した時のみ、一般的な普通の言葉づかいになる

店内へと向かった紗香と月影は恐ろしくパーフェクトなブリッジをする霊を目視する

「ほう？その角度……貴様！かなりの強者だな？私が相手しよう。」

月影が話しかけると霊はスッと立ち上がり、言葉にならない叫びを放つ

次の瞬間、霊は二つに別れて月影の前に立つ

「ほう？やはり・・・かなりの強者か！・・・来い！！」

月影の言葉をゴングに二体の霊は彼に襲いかかる・・・

だが、次の瞬間には月影は一体の霊を後ろから捕獲していた

「食らうがいい。秘技・浄霊ジャーマンスープレックスホールド！」

で、出たああああ！？と紗香が叫ぶ

この技は月影がプロレス霊に対して使う最強クラスの技の一つである  
高い霊力を込めたパーフェクトなジャーマンスープレックスにより、  
半強制的に浄化する紗香お気に入りの技なのだ！

「ふっ・・・まだまだいくぞ・・・」

そう言っで、もう一体の霊に対して月影は走り出し、高く飛び上がった

「しっかりと食らえよ！超秘技・月影双脚！」

で、で、出たああああああああああああおえ!!と  
紗香は叫んだ!

この技は月影が封印奥義と呼ぶ禁断の一撃

高く飛び上がり、霊力を込めた両足を相手に叩きつける超秘技である

ちなみにこの技は、創世王と呼ばれる起因にもなっており、一部の  
熱烈な月影ファンは『シャドー ーンドブルキック』と呼んでいる

技を食らい、吹き飛ぶ霊……のハズだった……

いや、確かに技を食らったのだが、次の瞬間に先に浄化したはずの  
霊に反撃を受けたのだ

「クッ……再生型か……しかも、再生速度が早いな。」

ジャーマンにより、頭から浄化したハズの霊は何事もなかったよう  
に立っている

そして、月影双脚を食らった霊もまた、頭にクリーンヒットしたはず  
なのに、何事もなかったように立っている

「ほう？超再生・二体同時生命機関型かな・・・しかし、コアは頭で正解のようだ？そのためのパーフェクトなブリッジなんだ・・・」

す、凄い・・・

紗香は思った

生で今まで悪霊と呼ばれる類の霊には出会ったことはない

その代わり、それ以上にある意味凶悪な閻魔やら魔界人やらを見てきている

今、目の前にいる憧れの男性『月影』には、それらに匹敵する強さを感じているのである・・・

その時彼女の中で、唯一愛する男である零と初めて月影が同格、またはそれ以上の存在になった・・・

「ふう。君ら霊を超再生型プロレス霊・乙型と甲型と命名しよう・・・しかし、まいったね？二体同時に倒すには時間がかかりそうだ・・・」

「あら？創世王さん？お手伝いしましょうか？」

月影が振り返ると、そこには紗香が笑顔で立っていた

「ほう？やってくれるかね？しかし、相手は並の霊ではないぞ？」

「大丈夫です！私も・・・並の高校生じゃないので！！」

そう言った紗香は胸の前に手を合わせ、力を込めて叫んだ・・・

「ゴル イオンハンマー・・・発動承認っ！！」

光が満ち溢れ、金色のハンマーが現れる

「・・・素晴らしい。私に合わせなさい・・・」

その言葉の後、紗香は素早く乙型・甲型をメッタメタに殴り、空中へと弾き飛ばす

空中では、月影が何処からか出した二本の刀『月影刀』（初公開）にて待機していた

「せっかくだから、君に決めて貰おうか？」

そうやって、月影は凄まじい斬撃を決めて地面へと弾き飛ばす

「わかりました！乙型！甲型！一体とも光にいい！なあああれええええええええええ！！」

ズゴゴゴーンッ！！

「やつ、やつたあ！創世王様！見てくれ……」

「馬鹿！油断するな！」

紗香が振り向くと、乙型と甲型は体こそ消滅していたが、首から先だけ存在し、紗香を襲いかかっていた……

あっ！ヤバッ  
・  
・  
・  
・

その刹那、  
「何か」が二体の霊を取り囲んだ

紗香はそれを一瞬だけ見て力を使った代償なのか、気絶をしてしまった……

10分後、彼女は再び月影の膝枕で目を覚ました  
しかも二人きりで

「ご、ゴメンナサイ!? てか、足手まといでスミマセンでした!」

「いや、助かったよ。ところで、あの力はどこで手に入れたんだい?」

「亡くなった祖母に貰いました……代々、娘が出来たら受け継ぐモノだと聞いています……」

それを聞いた月影はうつすらと微笑み、紗香の頭を撫でて言った

「素晴らしい力だ……。まあ、撮影は肝心なところで光に包まれ

て駄目だったみたいだが。」

「ご、ゴメンナサイ！」

「いや、構わないよ。その分、私も力を解放できたからね？」

「そういえば、気絶する前に見たあの黒い色をした技も創世王様の技ですよ？」

「ああ……そうだよ……」

そう言つて月影は紗香に顔を近づけてきた

「そ、創世王様……」

紗香は今まで感じたことのないほど興奮した

例えるなら、今この小説を読んでいる各読者が、今までで最高に興奮した状態の約120倍ほど興奮していた……

冷たくも柔らかい唇が紗香の唇に感触を残す

次の瞬間、今まで感じたことのないエネルギーが体の内から溢れ出し、紗香を苦しめた

「ああああああ！！な、何なのこれわああああああ！！！」

「何なのか？君の覚醒が始まったのだよ？破壊の巫女？」

「破壊の巫女？」

「そうだ．．．君が気絶する前に見た技．．．あれは断罪の黒き泡『パニッシュメントバブル』だ．．．知っているだろう？似た技を？」

知っている

零くんのあの技

ジャッジメントバブルにそっくりだった．．．

「私の本当の名は『閻魔零影』！おまえの知るアイツの前世の魂である零光と私は双子でね？そこまでは知らなかったのかな？」

そんな．．．

「言葉に成らんだろうな？まあ、いい．．．お前の先祖にその力を与えたのは私なんだよ？」

この力を？

「私はどうしても必要な力があつた！この世を破壊する光を欲した！解るか？破壊の巫女？」

どうしてそんな・・・

「どうして？必要だからさ？我が世界が！楽園が！誰もが平和に生きる世界が必要なのだ！・・・だから破壊の力をお前の先祖に与え、育てさせた！」

そんな・・・

「必要なんだよ？この世界が壊れることが・・・お前の覚醒の為に、我が下部である神楽姉妹を犠牲にし、死したのちのその魂をお前の力にそそいだのだ！更に、三獣獅と呼ばれる悪魔闘神の魂もブレンドした！お前はもう死ぬのだ！そして、破壊の巫女として真の姿に転生する！」

や・・・め・・・て

「我、命ずる！今、閻魔零影の名において！新たな命と成れ！転生せよ！破壊の巫女へ！ダークヒロインとなるのだ！」

[illegible]

さよなら零くん・・・

その時、零の部屋にある一つの写真立てにヒビが入った・・・

それには、中学の卒業式に零と紗香が二人で撮ったツーショットの  
写真が入っていた・・・

そのじゅうなな 破壊の巫女への発動承認！？（後書き）

いかがでしたか？

リニューアルに伴い、評価もゼロまで戻っているんですね？（-o-  
-;）

しかし、おかげさまでアクセス数は10万を超えていました（  
。;）

意外と読まれてるんですね私の小説・・・

引き続き、早めに更新出来るように頑張っていきたいと思います！  
ご評価いただけると、私は泣いて喜びますので、出来ればよろしく  
お願いいたしますm（- -）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9787a/>

---

セクシーバイオレンス～【俺と閻魔の青春日記】

2010年10月11日23時59分発行